

オーストラリアにおける報道被害の実証的検討 ——アザリア・チェンバレン事件の概要と分析

ジョン・ミドルトン*

- I はじめに
- II 本件の概要
- III 本件報道の評価と分析
- IV 報道被害救済の観点からの本件の検討
- V おわりに

I はじめに

2005年8月、オーストラリア法史上最も怪奇で論争を呼んでいる事件であるアザリア・チェンバレン事件（the Azaria Chamberlain case）は、事件発生から25周年を迎え、再び多くの国民の注目を集めている。

この事件では、怪奇な状況において乳児を亡くした無実の牧師の妻が多くの虚報を信じた訴追者により謀殺（murder）で起訴され、虚報の影響を受けた陪審により有罪判決を言い渡され、新しい証拠が出るまで無期懲役とされた。オーストラリアにおいては、これほど長い間絶え間なく報道や人々の噂話の対象とされてきた「殺人事件」はない。

北部準州政府（Northern Territory Government）は、様々な法手続に推定2,000万ドル（1オーストラリア・ドルを85円とすると、17億円）もかけ、さらに被害者らに対して130万ドル（1億1,050万円）の補償金を支払ったにもかかわらず、未だ謝罪する意向を示していない。また、この悲劇を「世紀の裁判」や1980年代の「メディアの一大イベント」として報道してきたマスコミは、報道界において報道被害者のためにかなり充実した裁判外の救済方法を設けているにもかかわらず、本件の被害者に対して一切救済を与えていない。それはなぜであろうか。

この事件は、オーストラリアにおける報道被害の最も悪名高い実例として、英

【一橋法学】（一橋大学大学院法学研究科）第4巻第3号2005年11月 ISSN 1347-0388

※ 一橋大学大学院法学研究科助教授

語圏の国々においてはよく知られており、それに関連した書籍¹⁾が15冊以上出版

- 1) そのうち、本稿は、次の4冊を主として参考になっている。

John Bryson, *Evil Angels* (Ringwood, Victoria and New York : Viking, 1985).

Lindy Chamberlain-Creighton, *Through My Eyes : The Autobiography of Lindy Chamberlain-Creighton* (rev. ed.) (Bowden, South Australia : East Street Publications, 2004).

Richard Shears, *Azaria : The Mysterious Disappearance of Azaria Chamberlain* (Sydney : Hutchinson Australia, 1982).

Norman H. Young, *Innocence Regained : The Fight to Free Lindy Chamberlain* (Sydney : Federation Press, 1989).

次のような入手困難な文献は、オーストラリア国立図書館 (National Library of Australia) に保管されている。

Steve Brien, *Azaria : The Trial of the Century* ([Australia] : QB Books, 1984).

Malcolm Brown and Paul Wilson (contribution by Judith Whelan), *Justice and Nightmares : Successes and Failures of Forensic Science in Australia and New Zealand* (Kensington, New South Wales : University of New South Wales Press, c. 1992).

John Bryson, *Le chien du desert rouge / recit traduit de l'anglais (Australie) par Pierre Girard* (French translation of *Evil Angels*) (Paris : Actes Sud, 1997).

Michael Chamberlain and Lowell Tarling, *Beyond Azaria : Black Light, White Light* (Melbourne : Information Australia, 1999).

Ken Crispin, *The Crown Versus Chamberlain, 1980-1987* (Sydney : Albatross Books, 1987).

Veronica M. Flanigan, *The Azaria Evidence : Fact or Fiction?* (rev. ed.) (Wahroonga, New South Wales : V.M. Flanigan, 1984).

Robert Lewis, *The Chamberlain Case : Was Justice Done?* (Collingwood, Victoria : History Teachers' Association of Victoria, c. 1990).

Frank Moorhouse, "The Azaria Chamberlain Case : Hysteria and the Intellectuals" in David Walker with Stephen Garton and Julia Horne (eds), *Crimes and Trials* (Geelong, Victoria : Faculty of Humanities, Deakin University, c. 1993).

Paul Reynolds, *The Azaria Chamberlain Case : Reflections on Australian Identity* (Brisbane : University of Queensland Press, 1989).

Buck Richardson, *Dingo Innocent : The Azaria Chamberlain Mystery* (Kuranda, Queensland : Leap Frog Press, c. 2002).

Noel Sanders, "Azaria Chamberlain and Popular Culture" in Graeme Turner (ed.), *Nation, Culture, Text : Australian Cultural and Media Studies* (London and New York : Routledge, 1993), ch. 9.

James Simmonds, *Azaria, Wednesday's Child* (West Melbourne : TPNL Books, 1982).

Marion Stell (ed.), *Eternity : Stories from the Emotional Heart of Australia* (Canberra : National Museum of Australia, 2001).

Phil Ward, *Azaria! What the Jury Were Not Told* (Epping, New South Wales : Phil C. Ward, 1984).

Belinda Wilson, *The Making of a Modern Myth : The Chamberlain Case and the Australian Media* (Unpublished M.A. thesis, Murdoch University, 1990).

されている。また、オーストラリアの大学の社会学コースやアメリカの大学のジャーナリズム教育、刑法の授業等において取り上げられることがある。日本においても、私が担当している一橋大学の英米法の講義の中でコモンロー諸国の法曹と陪審制のあり方について、学生に衝撃を与えて考えさせる教材として使用している。

本稿では、日本の学術ジャーナルでは初めて、報道被害の観点から、この事件の概要を明らかにし、それに関連した報道の特質を検討することにしたい²⁾。それによって、人権を無視し、人の悲劇を売り物にしがちなメディアによる被害の程度、誤報・虚報の危険性、およびそれに対する法的・倫理的救済の限界を解明することにする。

II 本件の概要

「私はごく普通の人であるにもかかわらず、この24年間の出来事は異常であった。わが子との死別、2度の検死審問、謀殺の告発、裁判、3年間の獄中生活、2度の上訴、王立調査委員会の調査、もう1度の最高裁裁判、もう1度の検死審問、そして私の半生のハリウッド映画化、オペラ化、連続テレビドラマ化を経験してきて極めて異常であると思っている。」

ーリンディー・チェンバレン＝クレイトン (2004)³⁾

1 事件の発生

1980年8月13日、マイケル・チェンバレン牧師 (Pastor Michael Chamberlain) (当時38歳) とリンディー (Lindy) 夫人 (当時32歳) は、2人息子のエイダン (Aidan) (当時6歳) とレーガン (Reagan) (当時4歳) と娘のアザリア (Azaria) (当時9週間半) を連れて、クィーンズランド州マウント・アイザ市 (Mount Isa) の自宅から北部準州に向かって旅に出た。8月16日からウルル国立公園 (Uluru National Park) のキャンプ場に宿泊することになり、自宅から持ってきていたテ

2) 1993年の修士論文でその概要について論じたことがあるが、未公表である。

3) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., pp. 2-3.

ントを自動車のすぐ横に設置した。

8月17日、オーストラリアの大荒野の象徴的存在であるエアズ・ロック (Ayers Rock=正式の名前は原住民語でウルルという。)を1日観光した後、キャンプ場に戻った。その夜、リンディーは、レーガン TENT の中に寝かせ、TENT のジッパーを開けた後、エイダンとアザリアを連れて、グREG・ローとサリー・ロー (Greg and Sally Lowe) という初対面の夫婦と話をしているマイケルがいるバーベキューエリアへ行った。その場所はTENT から20メートルほど離れていた。リンディーは、眠っているアザリアを抱きながらロー夫妻と話をし、エイダンとマイケルに夕食を食べさせた。

8時頃、リンディーは、エイダンとアザリアをTENT の中に寝かせようと考え、3人でTENT のある場所に戻り、アザリアをキャリーバスケットに入れたが、エイダンはもう少し食べたいとせがんだ。リンディーは、エイダンとともにTENT の外へ出て、自動車の中から缶詰のベークビーンズを取り出し、少しの間再度TENT へ戻った。そして、すぐに戻ってくるつもりで、レーガンとアザリアの2人が寝ているTENT のジッパーを開けずに、バーベキューエリアに向かってエイダンと競走した。しかし、その姿をサリー・ローに見られていることに気づき、恥ずかしく思ったので、途中で競走をやめ、歩くことにした。ところで、グREG・ローは、リンディーがアザリアを抱いてTENT の中に入ってしまったところも、リンディーが自動車の方に向かっていったところも目撃した。

リンディーが自動車の中から取り出した缶詰を開けている間に、ディンゴ (オーストラリアの野犬) が、TENT の中に入り込み、アザリアをくわえた。

リンディーは、エイダン、マイケル、サリー・ローの3人から、乳児が泣いていると言われ、TENT の方へ急いで戻ると、まさにディンゴがTENT から出てきたところであった。(リンディーの位置からは、ディンゴが何をくわえているかは分からなかった。)リンディーは、ディンゴを追い払ってからTENT の中に入り、アザリアを捜した。ところが、アザリアがいないことが分かったので、外へ出てマイケルやキャンプ場の人たちに向かって叫んだ。キャンプ場の人たちは、すぐさま警察やウルル国立公園の警備隊員を呼び、約300人で松明を持ってアザリアの捜索を始めたが、ディンゴの足跡ならびにTENT の中の血痕および唾液が

発見されたに過ぎなかった。

両親は、アザリアが無事であることを熱心に祈ったが、たとえディングに食べられていなくとも、夜中の砂漠の厳しい寒さの中では、風邪をひいている乳児は30分と生きてはいないであろうと諦め、警察の言葉に従って、残った2人の子どもを連れて近くのモーターに泊まりに行くことになった。リンディーと2人の息子は、テントの中にあった家族の洋服、寝袋、毛布等を持って警察官とともにトラックに乗ってモーターに向かったが、トラックに乘れなかったマイケルは、ロバータ・ダウンス (Roberta Downs) 看護婦を助手席に寄せ、自家用車でモーターに向かった。そのとき、カメラが趣味であるマイケルは、いつもの通り、大事なカメラバッグを自分の足下に置いた。そのことに気付いた看護婦が、そのような場所に置くと邪魔だとカメラバッグを取ろうとしたが、マイケルは断った。

2 メディアへの対応

翌朝から、チェンバレン夫妻は、フランク・モリス (Frank Morris) 警官のアドバイスに従って、マスメディアのインタビューを受け始め、そのニュースはオーストラリア全土だけでなく、海外でも報道された。モリス警官がウルルでインタビューを受けるように勧めたのは、そのようにしないと、メディアに激しく追求されたり、帰宅の際、待ち構えていたテレビカメラに撮影されたりするおそれがあるからであった⁴⁾。

チェンバレン夫妻がそのアドバイスに同意し、メディアに協力した理由は、3つあった⁵⁾。第1に、メディア報道がすぐに終了してくれるように希望していたからである。第2に、責任感の強い牧師とその妻として、チェンバレン夫妻は、国民に対して、エアズ・ロックのディングの危険性について注意を促したいと考えていたからである。そして、第3に、この事件の報道をきっかけに、悲しみに暮れている親として、娘がどんなに愛らしいものであったかを多くの人々に伝えたいと思っていたからである。

鉱山町であるマウント・アイザの進歩主義的な牧師として、マイケルは、毎週

4) Id., p. 60.

5) Id., pp. 60–64.

新聞記事を書き、また定期的にラジオ放送に出演するという経験があったので、その場の心の痛手にもかかわらず、落ち着いてメディアと話すことができた。

8月18日の朝、マイケルは、アデレードのニュース(The News)紙の記者による電話インタビューにおいて、テントとその周囲のモノクローム写真を撮り、そのフィルムとアザリアの写真を空輸で送るように頼まれ、承諾した。リンディーは、ダウنز看護婦の面前で、自動車の助手席に座って泣きながら、自分の両親に郵送するつもりであった写真の中から、新聞社に提供する1枚を選択した。その写真は、アザリアが生まれて5日目に、寝ている間に病院から自宅に連れ帰った際に撮影したものであった。後にその写真が生後9週間半経過した現在の写真として誤報されたため、その写真のアザリアの手を見た人々は、身体障害者、クレチン病患者、または痙性脳性麻痺患者に違いないと言った⁶⁾。

その日の午前中に、チェンバレン家一同は、自家用車を使用せずにモータルのバスに乗り、その途中、店で新聞写真のためのモノクローム・フィルムを買ってから、キャンプ場を訪ねた。キャンプ場で写真を撮っている間に、前日に知り合ったビル・ウェストとジューディー・ウェスト(Bill and Judy West)という夫婦と会話をし、リンディーが子どもを処分したがっていたという噂がすでに流布していることを初めて知った。

3 事件発生の記事

アデレードまでフィルムと写真を配達するパイロットにそれらを渡しに行った後、チェンバレン家は、モータルへ戻り、ジェフリー・ディルーカ(Geoffrey de Luca)というアデレードのテレビ・レポーター、アーウィン・チランダ(Erwin Chlanda)とスタンベリー(Stanbury)という2名の新聞記者によるインタビューに応じた。そのインタビューの中で、ディルーカは、自信にあふれる牧師で、かつ、おしゃべりであるというマイケルの性向を利用して、宗教に関する答えを引き出し、「わが赤ん坊の喪失は、神の意志である」旨の発言を行う場面の取り直しを頼むことができた⁷⁾。「どうやって動物がディンゴだと識別できたで

6) Id., pp. 61-62.

7) Bryson (1985), op. cit., p. 71.

しょうか」という質問に対するマイケルの答えは、次のように引用されている⁸⁾。

「テントの中の血痕を見たとき、瞬時の出来事だったに違いないと実感しました。その厚く織られた毛布に鋭く切られた、鉤裂きの跡——鋭い歯を持っている力強い獣の仕業だったことが分かりました。そのことができたのは、きっと飼犬以上のものだったし、われわれの頭の中で、それはやはり非常に力が強く、ずる賢い獣だったと認識しました。われわれは2泊目だったので、多分赤ん坊に忍び寄ったと思います。あれをあらかじめ企んだと思います。」

人前で泣くことを好まなかったリンディーは、インタビューの前に泣いていたことを隠すために暗いサングラスをかけていたが、前夜の出来事を話している間に泣き始めた⁹⁾。この場面は、惨事を強調するために、編集者により時間を延長された¹⁰⁾。様々な編集の結果として、そのレポートの視聴者には、チェンバレン夫妻は娘の死にもかかわらずおしゃべりであり、自信を持ち過ぎており、かつ、ふさわしくないほど冷静であるように見えた。

インタビューが終わった後、ディルーカは、宗教の影響を考慮してもチェンバレン夫妻の態度が奇妙であると、スタンバリーにコメントをし¹¹⁾、彼らと会見することがあまりにも容易であったため、疑いを抱いていると、ギルロイ警部 (Inspector Gilroy) に告げた¹²⁾。このことについて、リンディーは、その後、自叙伝において、「これは、非常につらい状況においてなお警察とジャーナリストに協力している人が、そのために、誤解され、非難された、史上初のケースであったかも知れない」¹³⁾と書いている。

メディアは、この他にも、8月18日にチェンバレン夫妻、警察、および公園警備隊員と多くのインタビューを行った。チェンバレン夫妻は、ギルロイ警部による長時間にわたる正式の取調べも受け、さらに翌日出発する前に、アザリアの死が「神の意志」であった旨、そしてこの辺に来る他の子どもの親に対する注意と

8) Id., p. 72.

9) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., p. 64.

10) Bryson (1985), op. cit., p. 72.

11) Ibid.

12) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., p. 64.

13) Ibid.

して碑を設立したい旨を警察に告げた。チェンバレン夫妻の碑設立の希望、宗教的な発言、および出発する前にたくさんの写真を撮ったり、店で記念品を買ったりした動機は、多くの人々に誤解された。

4 チェンバレン夫妻の態度に関する誤解

ディングがキャンプ場にあったテントの中から乳児をくわえ、形跡をほとんど留めずに逃げたというリンディーの主張は、最初から何人かの警察官、プレスの大部分、および多くの国民によって疑われた¹⁴⁾。私の家族は、リンディーの話を信じる傾向にあったが、それほど小さい子どもをキャンピング旅行で砂漠へ連れて行ったチェンバレン夫妻は愚かで無責任であったと、勝手に判断した。

ある博士は、もしリンディーが号泣して嬰兒殺を告白したならば、哀れみと同情の対象となったかも知れない、と書いている。「彼女は、それをせずに、キリスト教の信仰を大胆に表明し、人前で気儘に泣かず、自分の無実を反抗的に主張し、さらにディングがアザリアをくわえていったという見解に固執した。彼女の非妥協的態度は、ほとんど同情を得ず、彼女を公衆、メディア、および北部準州政府と衝突させる原因となった。」¹⁵⁾

ディング説を疑った人々は、自ら謀殺の空想的な理論を立て始めたが、その多くは、チェンバレン家の宗教についての誤った情報に基づいていた。チェンバレン家は、セブンスデーアドベンチスト教会 (Seventh-day Adventist Church) というあまり知られていないアメリカのプロテスタント宗派に所属している。この宗派の教義は、オーストラリアの公衆にはほとんど理解されておらず、エホバの証人、モルモン教等の比較的論争を呼ぶ宗派や一風変わった他の教派と誤認され易かった。同教会は、聖書の解釈に対して厳格な態度を取っており、アルコール、煙草、肉、およびカフェインの入っている飲み物を慎む健康的な生活を唱道している。マイケルとリンディーは、それぞれ教会の牧師として、またその教会の牧師の娘であると同時にその妻として、非常に信心深く、アザリアが行方不明となった後、その信仰が2人の支えとなったが、その宗教的発言は、懐疑的な多く

14) Young (1989), op. cit., p. xv.

15) Id., p. 10.

のオーストラリア人には、疑い、嘲り、軽蔑を持って受け取られた。

5 風説の流布

アザリアが行方不明となってから1週間とたたらないうちに、次のような全く根拠のない噂が、オーストラリア全土で広まった。

- アザリアという珍しい名前は、「荒野の中の生け贄」(sacrifice in the wilderness)を意味し、アザリアは人間の生け贄としてエアズ・ロックの頂上で両親に殺害された。(本当の意味は、「神に恵まれしもの」(blessed of God)である。)
- セブンスデーアドベンチスト教会の信徒は、不具の子どもを生け贄として殺害する習慣があり、アザリアは、クレチン病患者または痙性脳性麻痺患者であるという理由で両親に処分された。
- アザリアは、セブンスデーアドベンチスト教会の罪のあがないのために生け贄とされ、宗教的儀式の中で碑が設立された。
- アザリアは父親に殺害され、父親はすでに逮捕されている。
- アザリアは兄に殺害され、両親はその罪を隠そうとしている。
- アザリアの血痕は、エアズ・ロックの観光名所である肥沃洞穴(Fertility Cave)の中で発見されている。
- アザリアを治療した医者は、アザリアが虐待されており、さらにリンディーが子どもに対して無関心で邪険であったと言っている。
- チェンバレン夫妻は、1978年、ガイアナにおいてアメリカの一風変わった宗派により起こされたジョーンズタウン集団自殺・虐殺事件(Jonestown Massacre)と関係があった。

これらに加えて、次のような幾分根拠のある噂も広まった。

- アザリアは、スーパーマーケットのショッピングカートから落ちて怪我をしていた。
- リンディーは、アザリアに黒い服をよく着せた。

アザリアは、確かに1度ショッピングカートから落ちているが、その後の健康診断によると、怪我は一切しなかったとのことである。また、リンディーは、

レーガンのために作った黒いドレスを1度アザリアに着せたことも事実である。そのような行為は、オーストラリア文化においては非常識であるが、王立調査委員会(Royal Commission)は、後にドレスが提出された際に、害のあるものではないと判断した¹⁶⁾。

多くの噂は、警察により流されたものであり、オーストラリア全土において世論に大きな影響を与えた無責任なプレスにより好んで報道された¹⁷⁾。例えば、メルボルンのトルース(Truth)紙は、1980年9月6日、「私たちはわが子を殺していない」(We Didn't Kill Our Baby)という見出しの下で、リンディーが怒りを持って様々な噂を否定した電話インタビューについての記事を第1面に掲載した¹⁸⁾。後に第1回目の検死審問の際にリンディーが回答するよう求められた噂の中には、リンディーが大学でディンゴの研究をしたことがあるという、メディアによりねつ造されたようなものもあった。

6 チェンバレン夫妻への攻撃

ディンゴ説への疑問は、その後数年間、多数の歌、冗談、落書き、Tシャツのプリント等の大衆のサブカルチャーに反映した。ディンゴと乳児についての冗談集、漫画集等が出版され、「ディンゴ・ガール」(Dingo Girl)というロック・ミュージカルと「セブンスデー・ディンゴ」(Seventh Day Dingo)というコメディ・レコードが制作された。非常に気味の悪いTシャツが、その中には極めて名誉毀損的なものがあったにもかかわらず、販売された。芸能人やジャーナリストは、チェンバレン夫妻やその教会に対して宣戦を布告したのである¹⁹⁾。

16) Id., p. 17.

ちなみに、このドレスは、本件の象徴として、2001年3月よりキャンベラにあるオーストラリア国立博物館(National Museum of Australia)において展示されている。

17) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., pp. 94-95.

18) Bryson (1985), op. cit., p. 121.

19) Young (1989), op. cit., pp. 22-25.

7 親切な虚報の行方

チェンバレン夫妻は、1980年8月21日に帰宅した後、メディアによるインタビュー要求の攻撃を受けた。8月22日、人気のある女性週刊誌ウーマンズ・デー (Woman's Day) 誌のレポーターとカメラマンが、自宅を訪問し、リンディーにエアズ・ロックのディンゴの危険性について多くの人々に知らせるためにインタビューに応じるように要求した。アザリアが行方不明となった日にエアズ・ロックで撮影されたリンディーとアザリアの写真が、その雑誌の表紙に掲載されたが、マイケルが写真を撮ったときに使用したフィルターの色および印刷のミスのため、写真の中のアザリアの髪の毛が、その本当の色と違って見えたので、多くの人は、撮影されている子どもがアザリアではなく、写真のために借りた別の子どもであると言ひ、さらにその写真は、第1回目の検死審問の際に証拠として提出された。

その記事自体には、「そのとき、アザリアを抱いていて、足の指にキスして、ステキな赤ちゃんだと考えていたわ。マイケルは『そろそろ寝かせば。甘やかしてるよ』と言ったと思う」というようなねつ造された引用も含まれていたが、それらは、第1回目の検死審問の際、リンディーの信憑性を疑わせるために使用された。リンディーは、それはチェンバレン夫妻についての最も不正確な記事の1つであったが、作者は必ずしも正確に述べず、チェンバレン夫妻に対してなるべく親切な方法でリンディーの話を雑誌の読者に伝えるつもりであったと信じている、と証言した²⁰⁾。

8 アザリアの衣服の発見

アザリアが行方不明となった1週間後の8月24日に、アザリアの血痕が付着しているジャンプスーツ、シングレット、ブーティー、および破れたおむつが、キャンプ場から4キロメートル、ディンゴの穴から31メートルほど離れているエアズ・ロックのふもとで、ウォリー・グッドウィン (Wally Goodwin) という観光客により発見された。グッドウィンは、早速その発見を警察に報告したが、報告を受けたモリス警官が、警察の正当な手続に反して、まず衣服の写真を撮らず

20) Bryson (1985), op. cit., pp. 209-210.

に手で触れてしまったのを見て驚いた。モリス警官は、衣服を発見したままに戻すと、グッドウィンを安心させようとしたが、メディアは、警察が発表した情報に基づいて、衣服が「折りたたまれたまま」で発見されたと誤報した。この言い方は、衣服が人の手により配置されたものであると暗示するものであった。

アザリアがジャンプスーツの上に着ていた白いカーディガンは、そのときには発見されなかった。

8月18日にモーテルでディルーカとチランダが録音した「テントの中の血痕を見たとき、瞬時の出来事だったに違いないと実感しました。その厚く織られた毛布に鋭く切られた、鉤裂きの跡——鋭い歯を持っている力強い獣の仕業だったことが分かりました」という声は、それが衣服の発見についての新しいコメントであるかのように、アザリアの衣服の映像とともに、全国のテレビ局によって連夜放送された²¹⁾。

9 検死審問前の取材と報道

チェンバレン夫妻は、トゥデー・トゥナイト (Today Tonight) というブリスベーンのテレビ番組のインタビューに応じて娘の死を弔う信仰について話した後、そのライバル番組のインタビューにも応じるように執拗に頼まれた。電話でそれを堅く断ったにもかかわらず、一団のカメラマンが自宅の戸口まで押しかけ、勝手に撮影した。チェンバレン夫妻は、何か隠しているためインタビューを断っていると報道されることをおそれて、5分程度のインタビューに応じることを承諾したが、インタビューの中で、今までに聞いてもいなかったアザリアの死に関する噂に直面することとなり、大きなショックを受けた。マイケルは、噂のソースを教えるようレポーターに求めたが、断られ、しかる後に引き取るよう求めたが、それも断られた。リンディーは、早速電話でトゥデー・トゥナイトのスタッフに相談し、すでに弁護士に相談しており、その弁護士が彼らに連絡するだろうと、敵意のあるカメラマンに対して言うように助言された。チェンバレン夫妻は、すぐに弁護士に連絡し、当該番組のその一部について差止命令を出してもらったが、

21) Id., pp. 92-93.

この出来事について、2人とも有罪であったがために怒ったのだと、後に主張された²²⁾。

多数のテレビ・インタビューの中の1つで、リンディーは、ディンゴにジャンプスーツの中の乳児が取り出せるものかには信じ難いというレポーターのコメントに対して、ジャンプスーツが緩いため脱がし易かったと答えた後、牛の死体の皮を剥ぐディンゴの器用さについて以下のような類推を述べることによって、自分のイメージに回復できないほどの損害を与えてしまった。

「足を手のように使って、皮を引っ張っていき、まるでオレンジのように剥くんです。」²³⁾

謀殺の疑いの声が高まり、検死審問の日が近づくにつれ、「メディアの侵略」は本格的に始まった。リンディーは、回復し難いほど声がかれ、電話機も摩耗してしまうほど、毎日午前5、6時から午前1時にかけて絶えず、メディアからの電話を受けることになった。電話に出るのを避けられず、さらに警察が捜査の進行状況について何も教えてくれなかったので、チェンバレン夫妻は、電話をかけてくるジャーナリストから情報を求めることにしたのである²⁴⁾。

検死審問までの数か月の間、チェンバレン家は、ストレス度の高いマウント・アイザの環境からニュー・サウス・ウェールズ州クーランボング町 (Coorانبong) にあるセブンスデーアドベンチストの大学・住宅街へ引っ越したが、センセーショナルな報道をしばしば被ることとなった。その報道は、次のような見出しを含むものであった²⁵⁾。

- 「エアズ・ロック乳児の家族、噂に迷惑」 (Rumours Harass Family of Ayers Rock Baby)
- 「母親、乳児殺害？」 (Mother Murders Baby?)
- 「ゴシップ悪夢の自宅『中世の魔女狩り』」 (Home Was a Nightmare of Idle Gossip: "A Medieval Witch-Hunt")

22) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., pp. 81-82.

23) Young (1989), op. cit., p. 11.

24) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., pp. 92-93.

25) Shears (1982), op. cit., p. 61.

- 「ディンゴ・ベビー——「悪魔による試練」と、夫人」(Dingo Baby - It's Trial by Satan, Says Wife)

法医学実験室において行われたアザリアの衣服の検査およびアデレード動物園において行われた、ヤギの死体に乳児の衣服を着せ、それをディンゴに与えるという実験²⁶⁾についての報道の大部分は、くだらないものであった。新聞は、持っていた新しい情報を古い資料に混入させ、そのすべてが新しくかつ決定的なものであるかのように掲載した²⁷⁾。

10 検死審問

検死審問は、1980年12月15日にデニス・バリット (Dennis Barritt) 検死官のもとで北部準州のアリス・スプリングス裁判所 (Alice Springs Courthouse) において開かれた。皮肉なことに、ジャーナリストたちは、満員の法廷の中で座席が足りなかったため、判断を下す席である陪審席に座ることになった。

第1日目は、裁判所前がジャーナリストで混雑していたため、カメラマンは、チェンバレン夫妻の全身写真をなかなか撮ることができなかった。しかし、朝の休憩のときに廊下でリンディーがすごい剣幕で弁護士と議論している写真を撮ることに成功し、それが全国で新聞の第1面に掲載された²⁸⁾。

この裁判の報道のためか、無数のいたずら電話が、裁判所やチェンバレン夫妻が泊まっていたホテルへかかってきた。アリス・スプリングズの電話局は、6本以上の脅迫電話を受信したといわれている²⁹⁾。法廷に出席していたと思われる男からの「チェンバレン夫人を爆死させてやる」との脅迫電話の後、チェンバレン夫妻は、ボディガードを付けられ、警察護送隊に守られて裁判所へ出廷するようになった。そのような脅迫がその後も続いたため、非公開の住所に移ることになった。

26) この実験については、Gary Edmond, "Negotiating the Meaning of a 'Scientific' Experiment During a Murder Trial and Some Limits to Legal Deconstruction for the Public Understanding of Law and Science", [1998] *Syd. L. Rev.* 16 参照。

27) Bryson (1985), *op. cit.*, p. 187.

28) *Id.*, p. 203.

29) Shears (1982), *op. cit.*, p. 63.

検死審問が1980年12月19日にクリスマスのために延期された後、チェンバレン夫妻は、クーランボング町へ帰り、なるべく注目を集めないように努力した。結局、リンディーは、未だ続いている噂やゴシップに耐えられなくなり、変装するようになった³⁰⁾。

リンディーは、検死審問の際、自己の態度が誤って報道されないように、早めは無表情を装うようになったと、自叙伝に書いている³¹⁾。プレスは、リンディーを笑わせた上で、その写真を撮り、自分の娘の死を審理している検死審問においてさえ冷酷であるかのように描くことがしばしばあった。検死審問が1981年2月にエアズ・ロックにおいて再開された後、友人の冗談で笑ったところ、目の前にカメラがあることに気付き、顔を手で隠そうとしたリンディーの写真は、「母親の苦悩」(Mother's Agony)という大きな見出しとともにある新聞の第1面すべてを割いて報道された³²⁾。

検死官の判決は、1981年2月20日に下されたが、そのときの審理は、全国テレビ生中継で放送された³³⁾。それは、オーストラリア史上初の審理放送であったため、それを許可した決定は非常に論争を呼んだが、検死官は、この事件に関する報道の正確さを確保し、さらに直接かつ正確な伝達を行うことによりイニユーエンド (innuendoes)³⁴⁾、疑惑、およびゴシップを終わらせるように望んでいたのである。論争を呼んだものの、実際に報道された映像は、決して劇的なものではなく、検死官の頭と肩しか映っていなかった。

バリット検死官は、アザリアは1980年8月17日にテントの中で眠っている間に

30) Id., p. 70.

31) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., p. 143.

32) Id., p. 148.

33) これについては、Daniel Stepniak, "Technology and Public Access to Audio-Visual Coverage and Recordings of Court Proceedings: Implications for Common Law Jurisdictions", 12 *Wm. & Mary Bill of Rts. J.* 791, 811 (2004) 参照。

34) イニユーエンド (innuendo) というのは、他人の名誉を間接的に毀損する言説——すなわち、それ自体としては無害なものに見えるが特定の文脈に置かれたことにより誹毀的な意味を持つに至った言説——である。これについて、日本の『英米法辞典』(東京大学出版会)では、「風刺的言説; 陰喩」(「陰喩」は「隱喩」の誤りではないかと思う。)と訳されている。

詳しくは、ジョン・ミドルトン「虚報被害者救済法の日本的アプローチとコンロー的アプローチ」一橋大学研究年報・法学研究28 (1996年12月) 第2章参照。

野生のデインゴに攻撃されて死亡したものであり、さらにデインゴに負わされた損傷の結果として、即死であったと判示した。その上で、アザリアの衣服が折りたたまれたままで発見されたと誤認したため、アザリアの死体が、デインゴから取り戻されて、不特定の1名または2名以上の人間により何らかの方法で処分されたと判断した。同氏は、アザリアの両親および兄弟はその死の責任を一切負わず、さらにアザリアという名前は「荒野の中の生け贄」を意味したことはない」と強調した。

検死官は、判決の中において、チェンバレン家に対して深い哀れみを表し、チェンバレン夫妻に対して次のように述べた。

「貴方は、非常に悲劇的な状況において愛娘を亡くしただけでなく、数か月の間、イニューエンド、疑惑、およびおそらくこの国で目撃されている最も悪意あるゴシップの対象ともされている。」

バリット氏は、チェンバレン夫妻の証言は真実かつ正確であり、正直な独立した目撃者および多くの専門家の証言により裏付けされていると判示し、警察の捜査およびキャンプ場においてフェンスを設けていなかった自然保護に関する北部準州政府の政策を厳しく批判した。同氏は、特に北部準州の法医科学部を批判し、同学部の証拠がその無実について大きな懸念を抱かせた原因であり、その学部長に重大な過失があったに違いないと言った。

11 警察の捜査の継続

北部準州政府は、検死官の非難に非常に困惑し、ピーター・マコーリー (Peter McAulay) 警視総監は、捜査を続けることを誓った。ロンドン大学医学部で法医学を担当しているジェームズ・カメロン (James Cameron) 教授は、アザリアの衣服を検分した後、アザリアがデインゴにくわえていかれた説を否定し、さらにアザリアは切断用の道具で血管と首の肉を切断された結果、死亡したことおよびまだ出血している間に人間の手で持ち上げられていたことを報告した。あるシドニーのテレビ局は、カメロン教授の報告書は、乳児が完全に首を切られた可能性があることを示していると誤報した³⁵⁾。

1981年9月19日、北部準州の警察は、クーランボング町にあるチェンバレン家

の自宅の家宅捜索を行うと同時に、オーストラリア全土にわたってエアズ・ロックにいた目撃者のインタビューを実施した。エアズ・ロックで利用されたチェンバレン家の自家用車、マイケルのカメラバッグ、テントの杭、ナイフ、はさみ等が押収された。警察官は、マイケルが反喫煙デモに使用した1.4メートルほどの長さの子ども用の棺および将軍がテントの中に眠っている間に額に杭を刺されて殺害されたという旧約聖書の一節が色刷りで強調してあるような聖書も発見した。その「強調」は、実際は、その反対の頁にあった挿絵のインクがこすれることにより生じたものであった³⁵⁾。

ニュー・サウス・ウェールズ州衛生局法医部の法医生物学者であったジョイ・クル (Joy Kuhl) により行われた検査においては、自動車およびカメラバッグの中から、胎児ヘモグロビンの存在についての陽性反応が出た。(ところで、アンドルー・スコット (Andrew Scott) 博士がアザリアのジャンプスーツを対象に行った検査においては、アザリアの血液には25パーセントほどの胎児ヘモグロビンおよび75パーセントほどの成人ヘモグロビンが含まれていたという結果が出たが、これは、9週間の乳児としては正常である。) クールは、車の中でわずか5ミリリットル程度の血痕を発見したと推定したに過ぎないが、メディアは、車が「血痕だらけ」であったとする警察の発表を受けて、そのように報道してしまった。

12 警察の捜査に関する取材と報道

チェンバレン家が、警察の捜査の進行状況について何も教えられなかったのに対し、公衆に対しては告発の熱狂を煽るに十分な情報が毎日のように新聞に掲載されていた。メディアは、車やヘリコプターで自宅まで取材に来て、午前6時頃から午後9、10時にかけて家の前で待つことがよくあった。メディアと話したがらなかったチェンバレン家は、しばしば塀を越えて裏から入ったり、帰宅せずに学校や友人の家に残ったりする必要があった。リンディーは、留守を装うために、ろうそくの灯で夕食のしたくをし、感電したこともある。また、メディアは、外

35) Shears (1982), op. cit., pp. 95-96.

36) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., pp. 173-175.

から盗聴するために特別のマイクを使用したようである³⁷⁾。

チェンバレン宅に電話をかけたジャーナリストは、リンディーまたはマイケルの声が聞こえただけでも、インタビューを行ったと虚報した³⁸⁾。

シドニーのサン (The Sun) 紙の記者であるスティーヴ・ブライエン (Steve Brien) は、「マイケル・チェンバレンとの長いインタビュー」という見出しの下で完全にねつ造されたインタビュー記事を掲載した。同氏は、1984年に出版した『アザリア——世紀の裁判』(Azaria: The Trial of the Century) という本において、黒いドレス、乳児用の棺、聖書の中で強調された一節等について言及し、不正確な証拠およびアザリアという名前の意味、肥沃洞穴の中の血痕等の噂を事実として述べている。それは、名誉毀損に当たるようにも思われるが、チェンバレン夫妻は、無罪判決を得る前に、出訴期限法 (statute of limitations) の定めにより名誉毀損訴訟の訴権が消滅したため、当該訴訟を提起することはできなかった³⁹⁾。

13 第2回目の検死審問

1981年11月20日、北部準州最高裁判所 (Supreme Court of the Northern Territory) のトゥーイー (Toohey) 裁判官は、第1回目の検死審問の判決を却下し、検死審問のやり直しを命じた。

第2回目の検死審問は、1981年12月14日にアリス・スプリングズにおいてジェリー・ガルヴィン (Gerry Galvin) 検死官のもとで開かれた。カメロン教授、ジョイ・クール等の専門家による証言に関するニュースの大部分は、チェンバレン夫妻に対して批判的なもので、センセーショナルに報道された。

ガルヴィン検死官は、1982年2月2日に、リンディーを謀殺につき告発し、マイケルをその事後共犯として陪審審理に付託した上で、両者にそれぞれ5,000ドル (42万5,000円) での保釈を許可した。

37) Id., pp. 195–197.

38) Id., p. 199.

39) Id., pp. 199–200; Young (1989), op. cit., p. 10.

14 殺人事件裁判前の報道

殺人事件裁判以前の報道の大部分は、チェンバレン夫妻に対し批判的で、無罪の推定を無視したものであるといえる。例えば、あるラジオ・ジャーナリストは、「この事件が法廷に出されたら、リンディー・チェンバレンがなぜ小さな娘の喉を切ったのか、やっと皆に分かるようになるでしょう」という言葉でニュース速報を締めくくった⁴⁰⁾。メディアは、当然、ニュース価値のある裁判を希望しており、メディア有力者であるルーパート・マードック (Rupert Murdoch) の組織の編集主幹によると、チェンバレン夫妻の無罪判決の記事より有罪の記事の方がよく売れたそうである⁴¹⁾。

15 殺人事件裁判の始まり

1982年9月13日に「世紀の裁判」がダーウィンにある北部準州最高裁判所において始まった際、ミューアヘッド首席裁判官代理 (Acting Chief Justice Muirhead) は、陪審に対し、「この事件に関しては、われわれの時代では先例がないほどよく公表されています」と論評し、噂や先入観に惑わされることなく、正義を実現するように注意した。

その後、リンディーは、陪審制に対して信頼を置いている旨を再び断言しているが、ダーウィンにおいて裁判以前の公表の影響を受けていない12人を見つけるのは至難の技であったと書いている⁴²⁾。結局9名の男性および3名の女性からなる陪審が、150名の陪審員有資格者の中から選抜された。

16 リンディーのイメージ問題

リンディーが裁判の開始のとき、妊娠7ヶ月 (日本の数え方でいうと、8ヶ月) であったことは、その妊娠が陪審に同情してもらうための単なる手段であると考えた冷笑家の敵意のある反応を呼んだ。メディアは、リンディーの外見に焦点を合わせ、彼女が毎日着替える、あまりセンスの良くない妊婦服が、テレビの

40) Bryson (1985), op. cit., p. 323.

41) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., p. 670.

42) Id., p. 234.

ニュース番組でまるでファッショシ・パレードのように取り上げられた。多くの人は、そのような派手な洋服は牧師の妻にふさわしくないと考えた。また、ある婦人服の店のコマーシャルの歌とともに、リンディーが様々な衣装で裁判所に到着しているところの映像を含むアングラ・ビデオが、1984年6月に発売された⁴³⁾。

リンディーのドレスセンスは、本人がとるべき行動についての他人の期待には従いたくないことの示威行動として見ることができる。リンディーは、外見や態度を変えて、陪審や公衆を喜ばせるために演技をするように大きなプレッシャーをかけられたが、自分らしく行動し続けた。何をしても人に悪く判断されたというフラストレーションを次のように表している。

「アザリアの失踪の悪夢からわが家の家宅捜索にかけて絶えず、私は最善を尽くしてきた。警察に協力し、訳が分からない質問に答え、プレスやテレビとラジオの記者によるインタビューを受けてきた。そのうちに、真実が現れてくると思っていた。第1回目の検死審問の間、普段の自分であり、家族を励まし、マイケルの力になろうと努力してきた。それにもかかわらず、人々はまだ私を非難した。何をしても悪く思われた。笑えば、冷酷だと見られ、泣けば、単なる演技だと見られた。」⁴⁴⁾

「一体どう反応すればよいのか。服装は不適當だと見られ、歩き方、話し方、すべてが悪いと見られた。第2回目の検死審問の際までに、私の弁護士は、『じゃあ、何をしても悪いと見られるだろうから、なるべく無表情でいるように努力しなさい』と言った。私はそのようにしてみたが、それでもまだ悪いと見られ、そして冷酷で無関心な鉄面皮の悪女として知られるようになった。」⁴⁵⁾

「今度は、学位と高価な設備を持つ多くの人々が一生懸命、私が愛娘を殺したことを科学的に示そうと努力している間、私はただ座って聞いていた。そして、私を感じていた冷たく鈍い怒りを表に出さず、その証言をただ聞いていたので、また悪く見られた。謀殺でないと知っていた私には、その証言のすべてが関係なさそうに思えるほど、アザリアがどうなってしまったのかについて他

43) Young (1989), op. cit., p. 21.

44) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., p. 226.

45) Id., p. 203.

の人々の言った多くの言葉を聞かされた。[中略]

そして、人々が私を見るときは、見たいことしか見なかった。すなわち、鉄面皮の女殺人鬼であるとか。』⁴⁶⁾

17 メディアによるプライバシー侵害

リンディーは、裁判を報道したレポーターが「容赦しなかった」と書いている。裁判所の前で1度ならずテレビカメラに頭をぶつけられた。また、望遠レンズを持つカメラマンは、チェンバレン夫妻が泊まっていた家の前でよく待ち受けていた。バスルームが泊っている部屋の外にあったため、リンディーは、撮影されないように、友人が目隠しまたはおとりとして行動してくれるときおよびメディアが他のことに注意を引かれたときにしかトイレへ行けなかったとのことである⁴⁷⁾。

18 訴追側の主張

裁判におけるチェンバレン夫妻に対する訴追側の主張は、リンディーが自動車の助手席に座りながらアザリアを殺害し、後にマイケルにそれを告白し、マイケルが直ちに妻とともにその犯罪を隠すことに同意したとのことであった。また、リンディーが述べているディンゴ説は、アザリアが母親に殺害されたことを隠すための空想的な嘘であったとのことである。

マーフィー (Murphy) 裁判官は、その後、オーストラリア最高裁判所 (High Court of Australia) において、訴追側の主張を次のように説明している⁴⁸⁾。

「訴追側は、非常に気味の悪い方法により、非常に制限された期間の間に、さらに発見される可能性が高かった困難な状況において犯された謀殺を告発した。訴追側の主張によると、チェンバレン夫人は、5分から10分の間に、アザリアおよび息子のエイダンとともにパーベキューエリアから20-30メートルほど離れていたテントへ行き、ドレスの上にトラックスーツのズボンを穿き、アザリアをテントの中からそのそばに駐車していた自家用車まで連れて行き、自

46) Id., p. 226.

47) Id., pp. 237 and 245.

48) *Chamberlain v. R.* [No. 2] (1983) 153 C.L.R. 521 at 570-571.

動車の助手席に座って鋭い刃物（おそらくはさみ）でアザリアの喉を細長く切り、死体を（おそらく自動車の中にあったカメラバッグの中に）隠し、血液が付着している手およびトラックスーツのズボンを持ってテントに戻り、トラックスーツのズボンを脱いでアイスクリーム容器で手を洗い、落ち着いてエイダンとともにバーベキューエリアに戻った。

殺害行為がなされている間に大量の血液が自動車の中で流れたという訴追側の主張を考慮して、チェンバレン夫人は、この間に少なくとも自動車の中で目立った血痕をきれいに掃除することもできたはずである。その夜、自動車に乗っていた看護婦は、血痕に気付いていない。チェンバレン夫人は、この数分の間に、エイダンを寝袋の中に寝かせ、まだおなかが空いているとせがんだ彼の声を聞き、自動車の中から缶詰のベークビーンズを取り出す時間もあった。近いうちに7歳の誕生日を迎えるエイダンは、この間ずっと起きており、チェンバレン夫人とともにバーベキューエリアに戻るまでテントの中に残っていたと思われる。したがって（訴追側の理論が有効であると仮定して）彼は、目撃した可能性の高い怪奇な出来事にもかかわらず、アザリアの失踪の夜には、1名の証人（ロー夫人）に「犬はおなかに彼の赤ちゃんを入れた」と言い、さらに他の証人（ウェスト夫人）にディングが乳児をくわえていったかと質問されると、その通りであると答えたといわれている。

乳児の泣き声という証拠に関連するあらゆる状況を調査することも重要である。[中略] 3名の目撃者[サリー・ロー、マイケル・チェンバレン、およびエイダン・チェンバレン]は、訴追側の仮説によると、まだ主張されている犯罪の当事者でなく、さらにその中の1名はその夜にチェンバレン家と初めて会ったばかりの完全に独立した目撃者であるにもかかわらず、乳児が死亡しているはずのとき以後に乳児の泣き声を聞いたのである。しかし、その主張により殺人者とされているチェンバレン夫人には、聞こえなかったのである。」

訴追側は、アザリアの死体が8月17日の夜の何時かに衣服を着せたままで浅く埋められ、さらにその後に発掘され、衣服を脱がされた上で、再度埋められたとも主張した。そうした後、チェンバレン夫妻のいずれかまたはその双方は、衣服が発見されるであろうという意図を持ってそれをエアズ・ロックの近くに置いた

のである。

マーフィー裁判官は、以下のように、訴追側の主張に関する7つの問題点を挙げている⁴⁹⁾。

- 「1. チェンバレン夫人がその乳児を殺害した動機の完全な欠如、
2. アザリアの死体が発見されていないこと、
3. 同定された凶器の欠如、
4. 申立人 [リンディー・チェンバレンおよびマイケル・チェンバレン] のいずれかによる有罪の自白が一切なかったこと、
5. 母親による乳児の謀殺が自然に反する行為であり、説明を要するものである。母親の心が乱されており、または出生後の憂鬱症を患っている場合に起こることがあるが、証拠の上でチェンバレン夫人はそうでなかったこと、
6. チェンバレン夫人には罪を犯すために非常に限られた機会しかなく、または——信用できる目撃者の証言を信じると——罪を犯す機会がなかったこと、および
7. チェンバレン夫妻が2人とも人格者であるとの、異論のない事実。」

19 証拠の提出

裁判においては、訴追側および被告側による証拠の提出に28日もかかり、訴追側に召喚された45名の証人および被告側に召喚された28名の証人による証言は、審理記録の2,800頁を占めるに至った。提出された140件の証拠物には、チェンバレン家の自動車およびテントが含まれた⁵⁰⁾。

法医学的証拠⁵¹⁾の大部分は、非常に専門的であり、陪審員およびメディアを含

49) Id. at 572.

50) Shears (1982), op. cit., p. 160.

51) この証拠に関連した様々な問題については、Gary Edmond, "Azaria's Accessories: The Social (Legal-Scientific) Construction of the Chamberlains' Guilt and Innocence", (1998) 22 *Melbourne U.L.R.* 396, Ian Freckelton, "Judicial Attitudes Toward Scientific Evidence: The Antipodean Experience", 30 *U.C. Davis L. Rev.* 1137, 1162-1169 (1997)、および Paul Gerber, "Playing Dice with Expert Evidence: The Lessons to Emerge from R v. Chamberlain", (1987) 147 *Med. J. Aust.* 243 参照。

む素人にはほとんど理解できなかった。ほとんどの陪審員は、その証拠を正しく理解するためにも、裁判についての新聞記事を毎日読んでいたが、新聞から誤った情報を得たことはいうまでもない。ノートをとったただ1名の陪審員も、そのノートに難解な証拠に関する新聞の切り抜きを加えたといわれている⁵²⁾。

訴追側により提出された証拠には、次のようなものが含まれていた。

- 自動車の中から取られたサンプルおよび自動車の中にあった物（カメラバッグ、タオル等）のうち22件のサンプルについて胎児ヘモグロビンの存在について陽性反応が出たというジョイ・クールによる証言⁵³⁾。クールは、その実験室の通常の手続に従って実験に使用したテストプレートを全部破棄したため、それらを提出することはできなかった。被告側は、グローブボックスの下で発見された「動脈からの血痕」(arterial spray)と呼ばれている痕跡を除き、血痕が自動車の中で発見されたことについて争わなかったが、交通事故で怪我をした1名の成人、エイダン、レーガン、および教会からの乗せた他の子どもが、自動車の中で出血したことがあり、さらにアザリアも、助手席で抱かれているとき、物を吐き出したことがある旨を立証することにより、その血痕の存在理由を説明しようとした。そして、グローブボックスの下の銅プレートから発見されたパターンが同モデルの他車でも発見されていることも立証した。

また、被告側の証人である、ニューカースル大学生物学担当のボートチャー (Boettcher) 教授およびモナシュ大学医学部生物学・免疫学担当のネーアン (Nairn) 教授は、ジョイ・クールの実験結果における誤差のため、その血液が胎児のものであったという結論に賛成できないと証言した。

- ジャンプスーツおよびシングレットに付着した血痕が切り裂かれた喉から出たものであるという、カメロン教授を含む何人かの専門家による証言。この証拠は、被告側の証人により反証された。
- 手の小さい成人がアザリアの脇の下を持っていたことを示す掌紋がジャンプ

52) Young (1989), op. cit., p. 15.

53) この証拠については、Gary Edmond, "Science, Law and Narrative: Helping the 'Facts' to Speak for Themselves", 23 S. Ill. U.L.J. 555 (1999) 参照。

スーツにあったというカメロン教授による証言。この証拠は、被告側の証人により反証された。

- リンディーのトラックスーツのズボンの前部にあった血痕。これに対し、被告側は、アザリアの失踪の際、そのズボンがテントの中にあったと主張した。
- アザリアの衣服に加えられた損害が、ディンゴが噛んだことにより生じたのではなく、ディンゴによることを装うために（おそらく曲ばさみによる）切り裂いたことにより生じたという何人かの専門家による証言。この証拠は、被告側の証人により反証された。
- 織地が製造の際またはその後に切られる際に生じるような服地の房または輪が自動車の中およびカメラバッグの中から発見されており、さらにその房が乳児用のジャンプスーツから出たものである可能性があるという専門家による証言。これに対し、リンディーは、自分の子どもに皆ジャンプスーツを着せており、さらにジャンプスーツがそれを着ている子どもに小さ過ぎるような場合にはリンディーがジャンプスーツの裾を切っていると証言した。
- テントの中にあった物および乳児の衣服からディンゴの毛が発見されていないという専門家による証言。
- ジャンプスーツにディンゴの唾液が付着していないという専門家による証言。リンディーの確固たる主張によると、アザリアは行方不明となったときにジャンプスーツの上にカーディガンを着ていたので、被告側はジャンプスーツに付着している唾液の欠如を説明することができたが、そのカーディガンが発見されていなかったことは、訴追側によりリンディーの証言の信憑性を低めるために利用された。
- 衣服が発見された場所の土の種類と異なる、ジャンプスーツに付着していた土のサンプル。
- リンディーの発言に不一致があったという主張。

20 名誉毀損訴訟提起の噂

裁判が進み、チェンバレン夫妻が無罪判決を得る可能性が高まったと同時に、裁判後、リンディーが警察やメディアのすべての関係者に対し名誉毀損訴訟を提

起するという噂が、メディアの間で広まった⁵⁴⁾。チェンバレン夫妻の弁護士であるスチュアート・ティップル (Stuart Tipple) は、その公表の程度を考慮に入れて、オーストラリア史上最大の名誉毀損訴訟となり得ると考えたようである⁵⁵⁾。

21 有罪判決の言い渡し

陪審は、1982年10月29日午後2時20分に評決をまとめるために評議室に移った。午後2時30分に行われた最初の投票の結果は、有罪、無罪、および未決定がそれぞれ4名ずつであった。午後6時半までに、その投票は、有罪および無罪がそれぞれ6名ずつに変わった。陪審は、もう1度自動車およびテントを検分した後、結局午後8時20分に全員一致の有罪評決にまとまったが、何人かの陪審員は、それに対してまだ疑いを抱いていた。

ジム・オラン (Jim Oran) 記者は、チェンバレン夫妻に対し有罪評決を下す強力な社会的プレッシャーが陪審にかかっていたと考えている。同氏の言によると、もし陪審員が無罪評決を下したならば、ダーウィンの他の市民に面と向かうことは非常に困難であったとのことである⁵⁶⁾。

陪審は、午後8時37分に法廷で評決を下し、リンディーは、直ちに無期懲役の実刑に処された。翌日、マイケルは、懲役18ヶ月、執行猶予3年に処された。

チェンバレン夫妻が無罪であることは明白であると考え、被告側に好意的な事件概要の説示をしたミューアヘッド首席裁判官代理は、その後、本件について、プレスの権力を見くびっていたと述べているようである⁵⁷⁾。

22 次女の誕生

1982年11月17日、リンディーは、カーリア (Kahlia) という次女を出産したが、娘を殺害する機会を与えないために、行政決定により母親と乳児は、すぐに分離された。メディアは、次のような見出しの下で出産を報じた。

54) Bryson (1985), op. cit., p. 421.

55) Id., p. 386.

56) Young (1989), op. cit., p. 7.

57) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., p. 274.

- メルボルンのヘラルド (The Herald) 紙：「女兒だ」(IT'S A GIRL)
- シドニーのサン紙：「リンディーに女兒」(GIRL FOR LINDY)
- オーストラリアン (The Australian) 紙：「リンディー、“体大きく、力強く、元気一杯の女兒” 出産」(LINDY HAS 'BIG STRONG HEALTHY GIRL')
- ニューヨーク・タイムズ (The New York Times) 紙：「豪州の殺人者、出産」(Australian Killer Gives Birth)⁵⁸⁾

多くのレポーターは、カーリアという珍しい名前の「裏の意味」を調べようと躍起になった結果、あるジャーナリストはそれが「雄の犬」を意味すると誤報・虚報した⁵⁹⁾。

23 リンディーの保釈

カーリアが生まれた2日後の1983年11月19日に、オーストラリア連邦裁判所全員法廷 (Full Court of the Federal Court of Australia) は、2対1の多数をもって、連邦裁判所へのチェンバレン夫妻の上訴決定前に、リンディーの保釈を許可した⁶⁰⁾。フォックス (Fox) 裁判官およびノースロップ (Northrop) 裁判官は、もしカーリアが母親から分離されるならば、母親と乳児の間の心理学的結束の欠如が生じ、したがってその両者に対して望ましくない心理学的結果となることを指摘した医学的証拠に関心を持った。反対意見を述べたロックハート (Lockhart) 裁判官は、この保釈に関して、皮肉を込めて次のように明言した⁶¹⁾。

「私は、この生まれたばかりの子どもに危害が加えられる可能性があるとは一切示唆しないが、乳児である娘の謀殺で有罪判決を受けた人が、次に生まれた乳児である娘を育てたいという理由で保釈を得ることができるというのは、かなり奇妙かつ不条理であると思う。」

58) Bryson (1985), op. cit., p. 535.

59) Young (1989), op. cit., pp. 105-106.

60) *Alice Lynne Chamberlain* (1982) 6 A. Crim. R. 385.

61) Id. at 392-393.

24 オーストラリア連邦裁判所への上訴

1983年4月29日、連邦裁判所は、陪審の誤認が立証されていないという理由でチェンバレン夫妻の上訴を全員一致で却下した⁶²⁾。数人のジャーナリストは、3名の裁判官がチェンバレン夫妻に対し有罪判決を下したと誤報した⁶³⁾。リンディーは、弁護士が保釈を申請している間、一時ニュー・サウス・ウェールズ州の刑務所に入れられた。

25 保釈の申請

1983年5月2日、オーストラリア最高裁判所への上告決定前のリンディーの保釈申請は、同裁判所のブレナン (Brennan) 裁判官によって却下された⁶⁴⁾。ブレナン裁判官は、保釈を許可する特別の事情が存在しておらず、さらに保釈を許可しない方向に働く、より一般的かつ根本的な原則——すなわち、オーストラリアの司法制度が陪審の評決に与える価値——があると判示した。

「囚人が陪審の評決に異議を申し立てる場合に、上訴が審理される前に刑を停止または延期することは、評決に対して上訴の途がすべて閉ざされた後ののみ施行されるような暫定的な性質を与えることになる。[中略] そのような場合に保釈を許すことは、陪審の決定の終局性を減じ、評決を上訴過程の単なる一段階として取り扱うことになる。陪審は、刑事司法の運営の主要な特徴であり、その評決の効果が上訴裁判所による確認に従うと考えることは、間違いである。」⁶⁵⁾

ブレナン裁判官は、陪審の評決はすでに連邦裁判所への上訴で1回再確認されており、最高裁判所により撤回される可能性が高いとはいえないと述べた⁶⁶⁾。

62) *Chamberlain v. R.* (1983) 72 F.L.R. 1; 46 A.L.R. 493.

本件における陪審に関する問題については、Michael Chesterman, “OJ and the Dingo: How Media Publicity Relating to Criminal Cases Tried by Jury is Dealt with in Australia and America”, 45 *Am. J. Comp. L.* 109 (1997)および Michael Chesterman, “Criminal Trial Juries in Australia: From Penal Colonies to a Federal Democracy”, 62 *Law & Contemp. Prob.* 69, 98–99 (1999) 参照。

63) *Chamberlain–Creighton* (2004), *op. cit.*, p. 315.

64) *Chamberlain v. R.* [No. 1] (1983) 153 C.L.R. 514.

65) *Id.* at 519–520.

66) *Id.* at 520.

リンディーは、1983年5月4日にダーウィンにあるベリマー矯正センター (Berrimah Corrective Centre) へ戻された。その獄中生活に関する報道により、リンディーは、撮影されるおそれのために戸外へ出られないことがよくあった⁶⁷⁾。

26 オーストラリア最高裁判所への上告

上告審において、最高裁判所は、1984年2月22日の裁判の際に、陪審に提出された証拠から被告人の有罪について合理的な疑いはないとみなすことも可能であったという理由で、3対2の多数をもって陪審の評決を支持した⁶⁸⁾。多数意見に属する裁判官であるギブズ首席裁判官 (Chief Justice Gibbs)、メーソン (Mason) 裁判官、およびブレナン裁判官は、上訴裁判所は陪審の結論に賛成できないだけで有罪評決を撤回すべきではないと判示した。

勇気を持って、多数意見に同調しなかったマーフィー裁判官は、反対意見において、陪審制および上訴制度について次のように述べている⁶⁹⁾。

「上訴裁判所は、陪審の評決を大いに尊重すべきであり、陪審の役割を単なる名目的または象徴的な位置に落しめる試みは、慎まれるべきである。

しかしながら、陪審は、時としてやむを得ない事情から間違いを犯すものである。オーストラリアおよび他の国の歴史上、陪審制による保護その他の保護があったにもかかわらず、無実の者が、有罪とされることが時としてあった。そのような誤審のため、刑事上訴の裁判所に対しては、裁判官が誤って証拠を許容もしくは拒絶し、または陪審に対し誤った説示をした場合だけでなく、評決を正当化し得る証拠があっても、それが信頼できないものであると上訴裁判所がみなす場合にも、有罪判決を撤回する権限を与えられている。したがって、上訴制度は、無実の者への誤審に対するもう1つの保護として働いている。」

マーフィー裁判官は、自動車の中の血痕が胎児のものであったという証拠が信頼できないものであったため、リンディーに対する有罪判決も信頼できないと結論した⁷⁰⁾。また、マイケルについては、リンディーがたとえ有罪であっても、マ

67) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., p. 333.

68) *Chamberlain v. R. [No. 2]* (1983) 153 C.L.R. 521.

69) Id. at 569.

イケルの無罪の推定が法廷に提出された証拠により、十分覆されていないので、無罪であると判断した⁷¹⁾。

ディーン (Deane) 裁判官も、反対意見を述べて、陪審の評決にもかかわらず、証拠はリンディーがアザリアを殺害したことを合理的な疑いの余地がないほど立証しておらず、したがってその評決は信頼できず、不満足なものであり、誤審であると判示した。証拠は、マイケルが合理的な疑いの余地がないほど有罪であることも立証していないとのことであった⁷²⁾。

27 判決直後のドキュメンタリー・ドラマの放送

最高裁判所が判決を言い渡した直後、テレビの10チャンネルは、劇作家フランク・モアハウス (Frank Moorhouse) の作品であった「アザリア・チェンバレンの死」(The Death of Azaria Chamberlain) という非常に不正確なドキュメンタリー・ドラマを放送した。このドラマは、リンディーがチェンバレン夫妻の宗派の教義と相容れない形の会話で、謀殺を初めてマイケルに告白する場面を描写した。この番組は、海外でも放送されたが、セブンスデーアドベンチスト教会は、訴訟の提起も辞さないとして強く迫ることにより、一部分シドニーでの放送を防ぐことができた⁷³⁾。

28 後援会の政治活動

裁判所で争う手段が尽きた後、政治家に対してプレッシャーをかける後援会が、オーストラリア全国において設立された。1984年5月3日に、13万1,000名もの人々が署名した(後に15万名にもなった)、オーストラリア史上最大の請願が、当時オーストラリア総督 (Governor-General) であったサー・ニニアン・ステイーヴェン (Sir Ninian Stephen) に提出された。この請願は、リンディーの釈放および完全な司法調査を要求するものであったが、結局徒労に終わった。

70) Id. at 576.

71) Id. at 577.

72) Id. at 630.

73) Young (1989), op. cit., p. 20.

チェンバレン夫妻の弁護士は、2回にわたり特別な配慮によるリンディーの釈放を申請したが、それらは、それぞれ1984年3月26日と11月17日に却下された。

コリン・メーソン (Colin Mason) 連邦上院議員は、リンディーの承諾を得て、1984年6月14日に再調査を求める議員法案 (private member's bill) を上院に提出した。この法案は、採決段階まで至らなかったが、北部準州政府に対し、調査委員会を設立しない場合には、連邦政府が設立する可能性があるとの警告となった。

裁判官、政治家および医者を含む何人かの著名人が、この事件において起こった深刻な誤審に大衆の注目を集めるために、チェンバレン無罪獲得委員会 (Chamberlain Innocence Committee) を設立した。同委員会は、1985年6月4日にチェンバレン夫妻の弁護士に代わって北部準州政府に新しい証拠を提出し、有罪判決に関する再調査を求めた。この新しい証拠は、ジョイ・クールが胎児ヘモグロビンの存在を発見するために使用した免疫血清を製造したドイツの会社によるもので、その免疫血清が「それだけでは胎児・嬰兒および成人の血液を同定するのに適当ではない」という陳述を含むものであった⁷⁴⁾。この陳述の結果として、クールが提出した証拠は、無効とされた。無罪獲得委員会の主張の説得力にもかかわらず、司法調査を求める要求は、1985年11月12日に拒否された。

1985年10月16日、当時ニュー・サウス・ウェールズ州オンブズマンであったジョージ・マスターマン (George Masterman) 勅選弁護士は、チェンバレン家の自動車に胎児の血痕があったことを立証するためにクールが使用した免疫実験プレートが破棄されたことは、法廷でのチェンバレン夫妻の防御に不利益に働いたとする報告書を議会に提出した。

ジョン・ブライソン (John Bryson) 弁護士が『邪悪な天使』(Evil Angels) という本を1985年10月に出版し、フェアファックス・グループ (Fairfax Group) の新聞がその本の抜粋を連載したことにより、公衆はリンディーの無実を確信するようになってきた。アメリカのニューヨーク・タイムズ紙は、1987年に「有罪とされた豪州」(Australia Found Guilty) という見出しの下でその本の書評を掲載した⁷⁵⁾。

74) Id., p. 120.

75) Id., p. 14.

この頃から、一般の報道は、チェンバレン夫妻に対し好意的になってきた。テレビ・レポーターであるケヴィン・ヒッチコック (Kevin Hitchcock) は、自ら事件を調査して初めて、警察がリークし、メディアが真実として無批判的に報道した情報のうち、裁判手続に関するもの以外の大部分が噂、伝聞、およびねつ造であった事実に気付き、がく然とした。同氏は、自分もその誤審に加担したことを恥じて、真相を公表するために「アザリア——証拠の問題」(Azaria: A Question of Evidence) というドキュメンタリーを制作した⁷⁶⁾。

1985年11月13日、2人とも元連邦司法長官であるガレス・エヴァンズ (Gareth Evans) 上院議員およびピーター・デューラック (Peter Durack) 上院議員が、リンディーの釈放を呼びかけた。そこで、チェンバレン夫妻の弁護士が、直ちにリンディーの免許保釈 (release on licence) を申請したが、それもまた、11月25日に却下された。

29 アザリアのカーディガンの発見

1986年2月2日、デイヴィッド・ブレット (David Brett) という精神障害のイギリス人観光客の死体が、エアズ・ロックのふもとで発見された。ブレットは、奇妙な状況の中でエアズ・ロックから落ちて死亡し、その死体はディンゴにより荒らされていた。その死に関する証拠を捜していた捜索隊の1名が、殺人事件裁判の際にその存在が争われたアザリアのカーディガンをその近くで発見した。カーディガンは、アザリアの他の衣服が発見された場所から153メートルほど離れている所にあった。リンディーは、2月5日にダーウィンでカーディガンをアザリアの物であると認めた。

その死体およびアザリアのカーディガンに関する報道の大部分は、センセーショナルなものであった。あるテレビ番組は、ブレットの尻にあった英国国旗の入れ墨の真ん中には、「アザリア」と書かれていたと虚報した⁷⁷⁾。

76) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., p. 427.

77) Shears (1982), op. cit., p. 192.

30 リンディーの釈放

1986年2月7日、北部準州政府は、突然リンディーの釈放を許可し、調査委員会を設立すると発表した。その調査の結果にかかわらず、リンディーを刑務所に戻すことはないとのことであった。政府は、リンディーの釈放が特別な配慮に基づくものであると強調し、それがアザリアのカーディガンの発見と関係があることを否定した。

31 インタビュー契約

リンディーが釈放された後、チェンバレン夫妻は、ハリー・M・ミラー (Harry M. Miller) という有名な芸能マネージャーを採用し、自己に有利のようにテレビ出演や雑誌インタビューの契約をメディアと交渉し始めた。メディアの有力者であるケリー・パッカー (Kerry Packer) のオーストラリアン・コンソリデーテッド・プレス (Australian Consolidated Press) 社は、1986年にチェンバレン夫妻を「60ミニッツ」(60 Minutes) というテレビ番組に出演させ、また、リンディーをオーストラリアン・ウィメンズ・ウィークリー (Australian Women's Weekly) 誌のインタビューに応じさせるために、オーストラリア史上例を見ない25万ドル (2,150万円) もの謝礼を支払ったといわれている。この番組は、チェンバレン夫妻のインタビューおよびリンディーと女性陪審員の1名との感情的な再会の場面も取り上げた。

チェンバレン夫妻は、メディアの行動を支配し、メディアにより不利に扱われないための防御手段としてこの契約を正当化しようとしており、収益の半分を、弁護士費用を保証してくれた教会に寄付し、残りの半分以上を弁護士費用に充当したと言っている⁷⁸⁾。

チェンバレン夫妻が当時生活費に困っていたことも事実である。マイケルは、個人的な理由で1984年4月に牧師を辞職してから、有名過ぎるという理由で満足のいく再就職ができなかった⁷⁹⁾。リンディーも、最近同様の悩みを主張してい

78) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., pp. 562 and 729.

79) Lindy Chamberlain, *Through My Eyes* (Port Melbourne: William Heinemann Australia, 1990), p. xiii.

る⁸⁰⁾。

20万ドル(1,700万円)でインタビューに応じるという申し出を断わったテレビ・アナウンサーは、1992年1月までに、リンディーがテレビ局および雑誌出版社に独占インタビューを売ることによりおよそ90万ドル(7,650万円)を稼いだと推定している⁸¹⁾。その後、チェンバレン(元)夫妻のうち、特に公衆の好奇心の対象となっているリンディーが、現在は定期的にこのような「小切手ジャーナリズム」(chequebook journalism)に協力し、私生活に関する独占インタビューや写真を女性誌に掲載している。しかし、リンディーは、そのような取引を検討する際、金額より廉直(integrity)にこだわっているそうである⁸²⁾。

32 王立調査委員会

調査委員会は、1986年4月1日に国王の裁可(Royal Assent)を得た1986年調査委員会(チェンバレン有罪判決)法(Commission of Inquiry (Chamberlain Convictions) Act 1986)という北部準州議会の個別法律により設立された。同委員会は、1986年5月8日、ダーウィンにおいて、モーリング(Morling)裁判官の主宰のもとで開かれた。

委員会におけるレポーターの態度は、従来と違ったものとなり、チェンバレン夫妻は、裁判所前におけるメディアの取材を避けない限り、他の場所でメディアに追い回されることはないという暗黙の約束があったため、プライバシーを侵害されるようなことはあまりなかった⁸³⁾。

委員会においては、145名の証人が92日間にわたり証言した後、弁護士が9日間様々な証拠を提出した⁸⁴⁾。委員会が終わるまでに、車中の嬰兒の血痕の存在に関するジョイ・クールの証拠の信憑性は完全に否認され、その「血液」が実際は自動車製造に使用されている防音剤、マウント・アイザの銅の土、子どものこぼ

80) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., p. 742.

81) Kevin Norbury, "The Cheap News Stories With the Not-So-Cheap Price", *The Sunday Age* (Melbourne) (2 January 1992), p. 8.

82) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., p. 747.

83) Id., p. 603.

84) Shears (1982), op. cit., p. 208.

したミルクシェーク等であったことが立証された。同様に、ジャンプスーツの裂り目に関する証拠の信憑性も否認された。モーリング裁判官は、合理的な疑いの余地がないほど、当該損傷が犬歯によるものではなく、はさみまたはナイフによるものであることが立証されていないと判断した。

したがって、訴追側は、死体、凶器、自白、および目撃者を法廷に示すことができず、乳児がいつどこでどのように死亡したかを陳述できず、さらに謀殺が起こったことを立証することさえできなかった。

被告側により提出された新しい証拠には、当該ディンゴの足跡を追跡したブラック・トラッカー（原住民である追跡者）の証言、ディンゴの特質に関する研究、およびディンゴに攻撃された乳児の多数の他の事件の証拠が含まれていた。

モーリング裁判官は、委員会の報告書⁸⁵⁾において、次のように、この新しい証拠がチェンバレン夫妻の有罪判決を信頼できないものとしたと結論づけた。

「私の意見では、もしこの委員会へ提出された証拠が裁判の際に与えられたならば、裁判官は、いずれの証拠もチェンバレン夫妻の有罪判決を正当化し得ないという理由で、陪審に対し彼らを無罪にするように説示する義務があった。」

モーリング報告書は、1987年6月2日に北部準州議会へ提出されたが、その内容は、メディアによりまたも歪曲された。メディアは、モーリング裁判官が悲劇の起こった後のマイケルの行動を批判したことを強調したものの、慣例に従わないマイケルの反応（その「誇張の傾向」および「出来事を芝居じみた言葉で叙述する傾向」を含む。）が有罪を支持しないという委員長の主張を正しく理解しなかったようである⁸⁶⁾。同様に、多くのジャーナリストは、リンディーが主張されている謀殺を犯し、パーベキューエリアへ戻った後冷静に装うために「完璧な女優になっていたに違いない」というモーリング裁判官の仮定に言及したが、記者の大部分は、その仮定が事実に関する陳述ではなく、訴追側の主張に関する異常

85) *Report of the Commissioner the Hon. Mr Justice T.R. Morling: Royal Commission of Inquiry into Chamberlain Convictions* (Parliamentary Paper no. 192/87) (Canberra: Government Printer, 1987).

86) Young (1989), op. cit., p. 253.

な前提に対する同氏の懐疑的な評価の一部に過ぎないことを理解できなかった。さらに、メディアは、事件に人間が関わったか否かについてのモーリング裁判官の言及を、まだ可能性があるかのように引用したが、実際は、人間が関わった証拠は一切ないと強調されていた。

33 「無罪」への道

北部準州政府は、モーリング報告を受け、チェンバレン夫妻に恩赦を与えた。恩赦は有罪を前提とするものであるため、チェンバレン夫妻は、これに対し不満を感じ、無罪とされるまで争い続けることを誓った。

その後、北部準州政府は、一般法律である1987年刑事法典修正法 (Criminal Code Amendment Act 1987) を制定した。この法律による刑事法典の修正の結果、司法長官は、有罪判決を却下させるためにチェンバレン事件を刑事上訴裁判所 (Court of Criminal Appeal) へ付託することができるようになった。この法律は、1987年10月15日に国王の裁可を得た。

1988年9月15日、北部準州刑事上訴裁判所は、全員一致でモーリング委員会的事实認定を支持し、チェンバレン夫妻の有罪判決を却下した⁸⁷⁾。ネイダ (Nader) 裁判官は、公衆が「合理的な疑い」という表現を誤解することを案じて、チェンバレン夫妻の有罪に対し「深刻な疑い」が存在していたことを強調し、さらに裁判官全員は、無罪の推定により、チェンバレン夫妻が法に基づいて無実であったことを強調した。

34 本件の映画化

ジョン・プライソンの『邪悪な天使』に基づき、この事件を忠実に描いた同題名の映画は、1988年に完成し、「ア・クライ・イン・ザ・ダーク」(A Cry In The Dark) という題名で海外においても上映された。残念ながら、この映画は、まだ日本においては公開されていない。

87) *Reference Under s. 433 A of the Criminal Code by the Attorney-General for the Northern Territory of Australia of Convictions of Alice Lynne Chamberlain and Michael Leigh Chamberlain* [1988] N.T.S.C. 64.

チェンバレン夫妻は、その映画の正確さを確保するために、制作当初からコンサルタントとしてそのプロデューサーに協力した。リンディーとマイケルの役は、それぞれ有名なアメリカ人女優、メルル・ストリープ (Meryl Streep) とニュージーランド人俳優、サム・ニール (Sam Neill) により演じられることになり、その映画の野外およびメルボルンのスタジオにおける撮影は、ストリープがどれほど上手にリンディー役を演じ、オーストラリアのアクセントで話すかに関心を持つメディアや公衆の注目を集めた。

その映画の主演女優として、ストリープは、リンディーと同様の扱いを受けることに堪えなければならなかった。憎悪を記した手紙が郵送され、殺人の脅迫を受け、外出する際には安全を確保するためになるべくリンディーと別々に行く必要があった⁸⁸⁾。ストリープが、このようなプレス体験は初めてだと発言したほど、その家族のメルボルンにおける私生活に関する報道は介入的であった。多くの不正確な記事が、新聞に掲載されたが、それらには、リンディーとストリープが一緒にペルシャじゅうたんを買いに行ったという誤報およびチェンバレン夫妻がストリープとともに数百万ドルもするリゾート開発のための土地を購入したという虚報も含まれていた⁸⁹⁾。

この映画は、海外でも好評を博した。ストリープは、主演女優部門で1988年のニューヨーク映画批評家賞および1989年のカンヌ国際映画祭賞を受賞し、さらに1989年のアカデミー賞にもノミネートされたが、「告発の行方」(The Accused) のジョディー・フォスターに敗れた。

この映画は、一般の観客にかなり衝撃を与えた。例えば、テレビ番組の中でディンゴについての冗談で笑ったことのある有名な女性アナウンサーは、特別封切の際に、映画が終了してから30分の間、メディアに直面することができず、さらに2人のアシスタントの支えなしには歩くことができなかったほど当惑していた。また、バハマ発の飛行機の機内映画として上映され、映画が終わる15分前に飛行機がロサンゼルスに到着してしまったときには、乗客の4分の3が映画を見終わるまで上陸することを拒否し、次の便に遅れが出たことさえある⁹⁰⁾。

88) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., p. 622.

89) Id., pp. 654–655.

ところで、この映画でリンディー役が叫んだ「ディンゴがわが子をくわえてるよ」(The dingo's got my baby!)という衝撃的な台詞は、その後、ブラックユーモアとして、「サインフェルド」(Seinfeld)、「ザ・シンプソンズ」(The Simpsons)等アメリカの人気番組において流行している。

35 リンディーの自叙伝

リンディーは、1990年に『私の目で見たように』(Through My Eyes)と題した768頁もある自叙伝⁹⁰⁾を出版し、その後、積極的にその宣伝をし、ウーマンズ・デー誌にその抜粋を連載させた。この本を書いた動機は、家族の生活費を稼ぐための他に、ニュース番組の視聴者が忘れがちなニュースの裏にある人間の話を語ることであったという。

「誰がニュースの背景において起こり得ることをそのような人々に知らせるか。毎日のニュースのために、誇大妄想のメディア・マシーンの餌食となるように、ばらばらに引き裂かれる善意のオーストラリア人がどうなるか、誰かが述べる勇気を持つべきである。私は、この話を語るべきであると思った。」⁹²⁾

この自叙伝は、確かにその目的を果たしているが、多くのオーストラリア人は、それが有罪の女性が無実を主張し、娘の死で儲けるための単なる企画であると見るであろう。

36 補償金の請求と支払い

チェンバレン夫妻は、1988年に無罪であると認められた後、北部準州政府に対し、138万ドル(1億1,730万円)の弁護士費用ならびにリンディーの3年間の懲役および名誉毀損により被った損害についての一般的な賠償として、400万ドル(3億4,000万円)の法的義務のない支払い(ex gratia payment)を請求した。

1991年7月16日、北部準州政府は、チェンバレン夫妻に対し、法医学実験で破壊されたその自家用車、洋服、キャンプ用品等の費用として1万9,000ドル

90) Id., pp. 724-725.

91) Chamberlain (1990), op. cit.

92) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., p. 2.

(161万5,000円)を支払い、セブンスデーアドベンチスト教会に対し、それがチェンバレン夫妻のために払った弁護士費用として39万5,000ドル(3,357万5,000円)を支払ったと発表した。政府は、教会の弁護士費用を計算するに当たって、教会が得た寄付およびチェンバレン夫妻がメディア出演で稼いだ金額を差し引いた。また、弁護士費用のための借入れにかかった利息は、教会が負担することとなった。

チェンバレン夫妻が無罪であると認められた4年後の1992年5月25日に、遂に、北部準州政府は、独立した仲裁人であるモーリング裁判官が非公開の報告として政府に勧告した通り、リンディーに対して90万ドル(7,650万円)およびマイケルに対して40万ドル(3,400万円)の補償金を支払った旨を発表した。チェンバレン夫妻は、それを得る条件として、その他の補償金を請求する権利を放棄する文書に署名しなければならなかった⁹³⁾。5月31日に放送された「60ミニッツ」において、この130万ドル(1億1,050万円)の大部分はここ10年間の弁護士費用に使用し、残りの金額では通常のオーストラリア人よりも良い生活はできないことを強調した。チェンバレン夫妻は、もし北部準州政府が彼らに謝罪をも行うならば、この事件に対する公衆の態度も変わるであろうと述べたが、ペロン主相(Chief Minister Perron)は、そのコメントに対し、政府が悪意を持って行動したという考えおよびチェンバレン夫妻に謝罪するという考えを否定した⁹⁴⁾。

37 判決に対する不満

補償金のための争いが終結し、平穏な生活を送ることができるようになったが、チェンバレン夫妻は、アザリアがディンゴにくわえていかれたのではなく、謀殺されたのであるという第2回目の検死審問の判決が、法的にはまだ存在していることに対して不満を抱いていた。

リンディーの主張によると、この判決が存在しているため、北部準州政府は、ディンゴ説が虚偽であるとの考えを維持し、したがって責任を回避することができたのである⁹⁵⁾。

93) Id., p. 748.

94) "Lindy Says Debt Will Use Up \$1.3 m", *The Age* (Melbourne) (1 June 1992).

38 リンディーとマイケルの離婚報道

ある歴史学教授がリンディーとマイケルをオーストラリア史上最も憎まれている者として挙げている⁹⁶⁾にもかかわらず、オーストラリアの公衆は、今日でも彼らに対して強い関心を持っている。例えば、リンディーとマイケルは、別居し、1991年7月に確定離婚判決を得たことが明らかになったとき、毎日のようにインタビューを求められ、その記事はすぐにオーストラリアの3大女性誌に掲載された。

マードック系のニュー・アイディア (New Idea) 誌は、「マイケル・チェンバレン——孤立」(Michael Chamberlain: Out in the Cold)⁹⁷⁾という非常に不正確な記事を掲載した。この記事によると、車庫のような家で孤独な生活をしているマイケルに対し、リンディーは、両親と3人の子どもとともに立派な家に住み、成功した作家、テレビ・パーソナリティー、およびマーケティング・コンサルタントとして活躍していると報じた。この記事には、リンディーの自叙伝の中にあるマイケルに関する記述から2人が喧嘩をしているという噂も出ていた。このような記事とともに、マイケルの車庫の写真および不幸せそうなマイケルが自動車に向かって歩いているところの写真が掲載された。しかし、撮影されている自動車は、1981年9月に押収されたはずのものであるから、現在の写真として掲載されているものは、10年以上前の写真に違いない。

「マイケル・チェンバレン——リンディーとの結婚崩壊の理由」(Michael Chamberlain: 'How My Marriage to Lindy Fell Apart') および「チェンバレン家の最終章」(The Chamberlains' Final Chapter) という見出しの下で掲載されたウーマンズ・デー誌との長い独占インタビュー⁹⁸⁾において、マイケルは、家屋がリンディーの名義で登記されている理由で、引っ越すように求められたが、現在レーガンとカーリアとともに住んでいると話した。離婚の原因については、

95) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., p. 735.

96) Young (1989), op. cit., p. 282.

97) Norm Lipson, "Michael Chamberlain: Out in the Cold", *New Idea* (7 September 1991), p. 18.

98) Jerry Fetherston, "The Chamberlains' Final Chapter", *Woman's Day* (3 September 1991), pp. 6-9.

誰の責任でもなく、すべての事情（経験してきた試練、公衆やメディアによる厳しい詮索を含む。）に圧倒されたものであると言った。自叙伝に対するリンディーの熱情が、結婚生活に影響を与えたことは事実であるが、マイケル自身は、それを読んだことはないとのことであった。

リンディーは、同様に「リンディー・チェンバレン独りきり——『私はもう十分に辛抱している！』」（Lindy Chamberlain – On Her Own: 'I Have Suffered Enough!」）と題する、オーストラリアン・ウィメンズ・ウィークリー誌の独占インタビュー⁹⁹⁾に応じた。このインタビューにおいて、リンディーは、離婚について多くの質問を受け、さらにその離婚の本当の理由はリンディーが同性愛者または両性愛者であるからだという噂についても質問された。リンディーは、離婚に関して流布されているすべての噂を否定し、「私は、被害妄想になるつもりはない。もう十分に人の噂に堪え忍んでいる」とはっきりと言った。

39 リンディーの婚約と再婚の報道

補償金認定の発表の際、リンディーは、ウーマンズ・デー誌との独占インタビュー¹⁰⁰⁾において、1992年のリンディーの5回目のアメリカ講演ツアーのときに知り合ったリック・クレイトン（Rick Creighton）という9歳年下のアメリカ人との婚約およびワシントン州シアトル市に永住する予定である旨を発表し、オーストラリアを騒がせた。オーストラリアやワシントン州のメディアは、リンディーの「若いツバメ」（toy boy）や「謎の男」（mystery man）についての個人情報を探ろうとし、そのカップルがどこに住むか、リンディーの子どもで誰がアメリカへ同行するかという問題にも触れた。

リンディーは、1992年12月にカリフォルニア州パーム・スプリングズ市において再婚し、結婚式の独占写真を推定10万ドル（850万円）でウーマンズ・デー誌に提供した。

ところで、クレイトン夫妻は、数年間レーガンとカーリアとともに幸せにシア

99) Susan Duncan, "Lindy Chamberlain – On Her Own: I Have Suffered Enough!" in *The Australian Women's Weekly* (October 1991), pp. 6–9.

100) Jo Wiles, "Lindy to Marry Again!" in *Woman's Day* (15 June 1992), pp. 10–13.

トルに住んでから、リンディーの両親とエイダンの近くに住みたいと、1998年8月に家族そろってエイダンとマイケルが住んでいるクーランボング町に戻った。

40 マイケルの再婚と執筆活動

1994年4月、マイケルは、シドニーにおいてイングリッド・バーグナー (Ingrid Bergner) と再婚し、1996年6月にザーラ (Zahra) という娘が生まれた。当時、マイケルは、地方新聞のコラムニストとして活躍していた。その後、1996年にクーランボング町の歴史について、そして1999年にこの事件についての本¹⁰¹⁾を出版しているものの、リンディーに比べて、自分のプライバシーを守る傾向にあるため、その私生活に関する報道が少なくなっている。

41 第3回目の検死審問

上述したように、リンディーとマイケルは、アザリアがディングにくわえていかれたのではなく、謀殺されたのであるという第2回目の検死審問の判決が、法的にまだ存在していることに対してずっと不満を抱いていた。そこで、1995年3月に、北部準州の検死官が、アザリアの死因をディングによる攻撃として認める決定を求めた。

その要求に対し、1995年11月29日から12月13日にかけて、第3回目の検死審問がダーウィンにおいて行われた。しかし、ローンズ (Lowndes) 検死官は、結局、リンディーとマイケルの希望に反して、死因不明の判決 (open finding) を言い渡した。同氏は、107頁に及ぶこの判決において、王立調査委員会へ提出された証拠のうち、アザリアの死因およびその方法を確定的に立証するものが存在しないため、それらを「不明」(unknown) にするほかないと判示したわけである。

42 ディングによる多数の攻撃事件

1990年代後半以降、特にクィーンズランド州フレーザー島 (Fraser Island) で

101) Michael Chamberlain, *Cooranbong, First Town in Lake Macquarie, 1826-1996: A History Including Martinsville and Dora Creek* (Lake Macquarie City, New South Wales: M. Chamberlain, 1997); Chamberlain and Tarling (1999), op. cit.

多発した人間に対するディンゴの攻撃に関する報道で、ディンゴの実際の危険性やリンディーの証言の信憑性への国民の意識が高まった。

フレザー島だけでもこれまでに400件以上の攻撃事件が明らかになった。そのほとんどは、子どもに対する攻撃であったが、25歳のイギリス人女性や63歳のドイツ人女性に対するものもあった。そのうち、1998年8月に、実際に本件を思わせるような事件が発生した。その事件では、家族とともにキャンピングエリアにおいてピクニックをしている13ヶ月の女兒がディンゴにくわえていかれそうになったが、その父親により助けられた。

最も深刻な事件は、2001年4月に起こった。兄弟である9歳と7歳の子どもが歩いている間に2匹のディンゴに攻撃され、切り裂かれた。その父親は、すぐ彼らを助けようとしたが、長男はすでに死亡していた。

このような事件の報道の結果、多くのオーストラリア人は、ディンゴがただの犬ではなく、危険な捕食動物であることを認識するようになった。

43 本件のオペラ化

2002年10月、オペラ・オーストラリア (Opera Australia) は、「リンディー」と題する、作曲家モイヤ・ヘンダーソン (Moya Henderson) のオペラをシドニー・オペラ・ハウスにおいて上演した。その4回の公演は、批評家から高く評価された。

44 老人の「自白」

2004年7月、フランク・コール (Frank Cole) という78歳の年金受給者は、1980年8月17日に友達と4人でウルル国立公園において犬の餌のためにうさぎを狩猟した際、乳児をくわえているディンゴをライフル銃で撃ち、違法銃猟で起訴されるのをおそれたため、結局警察に連絡せずに、メルボルンまで遺体を持ち帰ったことを明らかにした。その友達がおそらくその自宅の裏庭に遺体を埋めたかも知れないとのことであった。他の3名は、すでに亡くなっていた。

その数ヶ月前にコールから電話を受けていたリンディーは、アザリアの服装について事実と異なっている点があるとして、その話が信じ難いと反論した。コー

ルは、テレビ局が行った嘘発見器による検査に合格した後、北部準州警察の取調べに協力したが、その結果、検死官局 (Coroner's Office) は、警察のレポートを公開せずに、検死審問を再開するための新しい証拠が存在していないと発表した。

45 本件の連続テレビドラマ化

2004年11月、全国のセブン・ネットワーク (Seven Network) は、「私の目で見たとおり」と題する、延べ4時間の連続テレビドラマ (mini-series) を放送した。チェンバレン夫妻の役は、オーストラリア人俳優であるクレグ・マクロックラン (Craig McLachlan) とミランダ・オット (Miranda Otto) が演じた。リンディーは、コンサルタントとしてその制作に協力し、さらに端役をやった。

その放送に合わせて、リンディーは、1990年の自叙伝の中身をアップデートし、803頁に及ぶ新版を出版した。私は、リンディーのウェブサイト¹⁰²⁾からサイン入りのものを購入しているが、リンディーが手書きしてくれた長い献辞は、「真実、廉直、信頼、正義、および寛容については一切妥協しないこと」(Truth, Honesty, Trust, Justice and Tolerance are never negotiable) という言葉から始まっている。

46 今後の課題

リンディーとマイケルは、未だに北部準州政府から謝罪を受けていないこと、および、アザリアの死亡証明書に明らかな死因が記載されていないことについて不満を抱いている。それらが得られない限り、家族として、その悲劇を締めくくることができないとしている。

謝罪については、リンディーとマイケルは、まだそれを正式に要求していないが、それは、被害者として、政府の方から誠意を持って自発的に謝罪をされたいという気持ちが強いからである¹⁰³⁾。それに対し、クレア・マーティン (Clare Martin) 首相は、正式な要求がある場合、適切に検討するとしている。

102) その URL は、www.lindychamberlain.com となっている。

103) Interview with Lindy Chamberlain-Creighton by Annie Gastin on ABC Local Radio, Northern Territory (7 October 2004).

また、死亡証明書の件については、リンディーは、それが書面上できることで、必ずしも税金がかかる手続ではないとしているが、第3回検死審問の判決の内容を考慮に入れると、その見解は非現実的であるように思われる。もし北部準州政府が本件の事実を明らかにする気になれば、最新のDNA鑑定技術を用いて、アザリアのおむつの中で発見された骨の一部およびカーディガンに付着していた唾液を分析する方法がある¹⁰⁴⁾。

このようにして、本件は現在に至っている。次に、様々な角度から本件における報道を振り返ってみることにする。

Ⅲ 本件報道の評価と分析

「一体なぜメディアが私たちの事件についてあれほど大騒ぎし、センセーショナルに報道してきたのか私には今でも理解できない。」¹⁰⁵⁾

「この24年間の出来事は、このメディア報道のために、まるでテレビの連続ドラマのように非現実的なものとされた気がする。[中略] メディアが報道したことが現実であることは1度もなかった。それが真実であることは1度もなかった。私が新聞で読んだレポートは、実際に起こったこととは全く異なっていた。」¹⁰⁶⁾

「承諾による写真撮影や正確な引用なら構わないが、盗聴され、迷惑をかけられ、言ったことのすべてがつまらない報道のために新聞の中で歪曲・ねつ造されるのは、全く別の話である。」¹⁰⁷⁾

—リンディー・チェンバレン＝クレイトン (2004)

104) Judy Skatssoon, "DNA Could Settle Azaria Case", *ABC Online Science News* (16 August 2005).

105) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., p. 584.

106) Id., p. 2.

107) Id., p. 5.

1 本件におけるジャーナリズム問題

アザリア・チェンバレン事件は、メディアにとっては儲け口であり、倫理的な報道にとっては災難であったといわざるを得ないと叙述されている¹⁰⁸⁾。また、この事件は、ジャーナリストが関心を持つ様々な問題——すなわち、センセーショナルリズム、悪趣味、事実の誤報、度を越した推測、完全なねつ造、偏見に満ちた見出しと論評、迷惑行為、プライバシー侵害、法の無知、科学の無知と科学的証拠の誤解、小切手ジャーナリズム、出来事のニュース価値を利己的に利用するボスター、不正直なテレビ宣伝、不注意なもったいぶった話、注意を払ってはいるがもったいぶった話、無罪判決への偏向、有罪判決への偏向、政治的理由によるニュース管理、ライバル新聞との競争を理由としたニュース管理、涙をさそう目的の散文等——を露呈させたといわれている¹⁰⁹⁾。

公衆は、チェンバレン家に関心を持ち、この事件に関するニュースを要求したので、メディアは、チェンバレン夫妻やその教会が訴訟を提起する可能性が低いと確信しながら、持っている情報を、それが真実であるか否かを問わず、提供した。この事件に言及する見出しを掲載している新聞は、倍以上売れた¹¹⁰⁾ため、何でも報道する金銭的誘因は、極めて大きかったといえる。事件の初めの頃、「エアズ・ロック」、「ディンゴ・ベビー」、「ディンゴ・マム」(Dingo Mum)、「アザリア」、および「検死審問」といった言葉が、見出しによく使用されたが、結局そのキーワードは、「リンディー」のみとなった。特に、マードック系のプレスが、この事件の報道については無責任であったといわれている¹¹¹⁾。

2 海外における本件の報道

この事件は、オーストラリアだけでなく、海外でも注目を集めた。例えば、ロンドンのタイムズ(The Times)紙は、以下のように、1980年から1988年にかけてこの事件に関する記事を合計65件掲載している。

108) Young (1989), op. cit., p. 271.

109) Sam Lipski, "Azaria Case Reflects Journalism's Worst – And Best", *The Bulletin* (25 February 1986), p. 86.

110) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., pp. 650–651.

111) Young (1989), op. cit., p. 271.

1980年： 0件
1981年： 4件
1982年： 25件
1983年： 11件
1984年： 1件
1985年： 1件
1986年： 13件
1987年： 6件
1988年： 4件

この間、朝日新聞、毎日新聞、および読売新聞は、この事件について1度も言及していないが、デイリー・ヨミウリ紙は、1992年5月26日に「オッジー夫婦、ディンゴ事件で98万ドル得る」(Aussie Couple Wins \$980,000 In Dingo Case) という見出しの下で補償金認定についての連合通信社 (Associated Press) のレポートを第5面に掲載し、さらに1995年9月28日と11月15日に第3回検死審問についてのロイター通信社 (Reuters) のレポートを第3面に掲載した。

BBC のウェブサイト¹¹²⁾は、現在、この事件についていくつかの記事を掲載している。

3 公衆の関心の理由

公衆がこの事件に関心を持ち続けている多くの理由の中には、①ディンゴ説に対する一般的な不信、②主流のクリスチャンにより「異端」と決めつけられた教派へのチェンバレン家の所属、③チェンバレン家のキリスト教信心に対する非宗教的な国民の不快感、④それほど熱心なクリスチャンにそれほど大きな嘘をつくことができたか否かという疑問、⑤チェンバレン夫妻が冷酷で邪悪であるという認識、⑥法医学専門家間の論争という点から見て、科学に対する公衆の信頼が正当化されるか否かという疑問等も含まれる¹¹³⁾。

112) その URL は、www.news.bbc.co.uk となっている。

113) Keith Windscuttle, *The Media* (Ringwood, Victoria: Penguin, 1984), p. 298; Young (1989), op. cit., p. 283.

4 メディアに対する批判

これまで考察してきたように、この事件に関する多くの報道は、不正確であった。リンディーの言によると、オーストラリア全国においていつも正確にニュースを報道してくれたジャーナリストは、4名しかいなかった¹¹⁴⁾。リンディーは、次のような感情的な文章で、この事件を報道した記者の態度に関する印象を表現している¹¹⁵⁾。

「あるジャーナリストは、いつも法廷に入って、完璧にノートをとっていた。[中略] 私たちは、すぐに誰が良心的であるか分かった。彼らの報道は、とても正確であったから。他の者は、正確に報道する意図を持っておらず、その日のキーワードまたはセンセーショナルな出来事を探し出して、それを見出しに使用しただけであった。彼らは、ほとんどサボっていて、次のように他の人に聞いて回った。『何かあったか? 今日、何書こうか?』『2、3行教えてくれない? ちょっと用事があって、行けなかったんだ。』『聞いてなかったけど、どんな話あったか?』そうして、勝手に何でも書いてしまった。」

シドニー・モーニング・ヘラルド (Sydney Morning Herald) 紙のマルコム・ブラウン (Malcolm Brown) 記者は、初めからこの事件の細目を公正かつバランスよく報道した唯一のジャーナリストとして一般に認められている。ブラウンは、チェンバレン夫妻の人格的特性を認識していたが、変わった人であることと、有罪であることとを区別することができた。北部準州の警察および公訴官 (Crown Prosecutor) に対する同氏の批判は、それぞれ身体障害への脅迫および名誉毀損訴訟の脅迫を招いたほどであった¹¹⁶⁾。

プレスの自由は、メディアが時の政府により操作されないことを必要とする。テレビ・レポーターであるケヴィン・ヒッチコックは、この事件におけるメディアの役割に関するスピーチにおいて、ジャーナリストが北部準州の警察からのリークを、その正当性を十分に疑わずに、受け入れたと述べている¹¹⁷⁾。同氏は、

114) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., p. 540.

115) Id., p. 650.

116) Young (1989), op. cit., pp. 13-14.

117) Id., p. 285.

チェンバレン夫妻がレポーターの好意 (friendship) を期待する権利は有していなかったかも知れないが、当然のこととして客観的な報道を期待する権利は有していたと付け加えた。

エイドリアン・ハウ (Adrian Howe) 教授の見解によると、この事件は、オーストラリアの最大の刑事誤審の1つであるばかりでなく、リンディーがメディアや公衆の大部分によって中傷された方法を考えれば、オーストラリアで最も暴力的な出来事の1つでもあるといえる¹¹⁸⁾。リンディーの体つきや服装に執拗なまでに着目したプレスは、「彼女のしなやかな体は、見える限り完璧に日焼けてしていた」等のコメントをもって、リンディーに性的特徴を与え、その結果「セクシーな女」と「母親らしい女」の対立を生じさせ、リンディーが有罪であるかのような印象を与えた。リンディーが無罪であると認められた後、メディアは、リンディーを非常に女らしい通常の母親像に作り変えて、家族のもとへ戻した。

リンディーは、アザリアの名前が「荒野の中の生け贄」を意味する旨やリンディーがアザリアに黒い服を着せた旨のレポートによって、養育や愛情について母親がなすべきすべての慣例に反した、異常で邪悪な魔女のような女性に仕立てられたともいえる¹¹⁹⁾。宗教的な生け贄に関するメディアの推測は、宗教的差別に当たるとして、反差別委員会 (Anti-Discrimination Board) により非難されている¹²⁰⁾。

セブンスデーアドベンチスト教会は、獣肉を食べず、また、土曜日にはスポーツを観戦する一般のオーストラリア人と違って、これ見よがしに礼拝する、無名の一風変わった教派として描写された¹²¹⁾。同宗派の牧師として活躍しているノーマン・ヤング (Norman Young) 博士は、教会も、チェンバレン夫妻と同様に合

118) Adrian Howe, "Chamberlain Revisited: The Case Against the Media", (1989) 31 *Refractory Girl* 2, reproduced in Ngaire Naffine (ed.), *Gender, Crime and Feminism* (Aldershot and Brookfield, USA: Dartmouth, 1995), ch. 9; Elisabeth Lopez, "Myths, Mothers and Guilt by Media", *The Age* (Melbourne) (21 August 1991).

119) Windscuttle (1984), op. cit., p. 298; Paul Wilson, "Media Coverage of Crime and Justice" in John Henningham (ed.), *Issues in Australian Journalism* (Melbourne: Longman Cheshire, 1990), p. 179.

120) Young (1989), op. cit., p. 10.

121) Wilson (1990), op. cit., p. 179.

理的な理由もなく有罪とされたのであり、後に無罪であると認められたものの、アドベンチストに対する敵意は未だに存在している¹²²⁾と書いている。

5 公衆の責任

ハウ教授は、このようなシナリオは再び起こる可能性があり、それが正義を唱える人には受け入れられるものではないにもかかわらず、国民は、そのようなシナリオをメディアに期待するようになったかも知れないと述べている¹²³⁾。同氏の見解によると、この事件において、メディアは公衆と共謀し、公衆が聞くことを欲したニュースを提供したのである。

リンディーも、公衆も責任を負うべきであると考えている。

「なぜメディアを非難するのか。公衆がそのような報道を要求しているので、今日、ニュースがなければ、さあ、公衆が要求しているように脚色せよ、さもなければ、“ねつ造”せよ。メディアは、全くその通りにしてしまいがちである。このようにすれば、需要と利益、そして供給と欲望が増大する。1つの者のみを非難することはできない。制作者、レポーター、そして消費者である公衆のすべてが非難されるべきである。」¹²⁴⁾

6 司法制度の責任

1985年の国際刑事法会議において、ニュー・サウス・ウェールズ州最高裁判所 (Supreme Court of New South Wales) のリー (Lee) 裁判官は、この事件におけるメディアの役割を厳しく批判した。同氏は、裁判所がその義務を果たさなかったからこそ、殺人裁判がメディアにより「笑劇」(farce) や「ヒステリーのようなサーカス」(hysterical circus) とされたのであると述べ、同会議に出席した多くの弁護士の賛同を得た。同氏は、プレスを有罪か無罪かという判断領域に立ち入らせる司法制度をも批判したが、他の弁護士は、陪審制度に対する公衆の信用が減じないように、陪審の評決を公に批判することを避けたようである¹²⁵⁾。

122) Young (1989), op. cit., p. 271.

123) Lopez (1991), op. cit.

124) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., p. 733.

7 リンディーとマイケルの責任

最後に、この事件の報道の性質および程度に関して、リンディーとマイケル自身がどれほど責任を負うべきかという問題が残る。彼らをその人格的特性を理由として非難することはできないが、「リンディー自身は刑務所の中にまで話を持ち込んだ」という、あるジャーナリストのコメント¹²⁵⁾は、ある程度真実であるといえる。殺人事件の裁判に当たって、チェンバレン夫妻のバリスターは「この国の法史上、これほど多弁な被告はいなかった」と述べ¹²⁷⁾、さらに、訴追者は、リンディーが進んで話したがることが「この事件の特徴」であると陪審に言った¹²⁸⁾。

ところが、チェンバレン夫妻は、真実が発見されるようにしようとし、また、話さなければ、「引用」がねつ造されまたは他者の言葉から創作されるおそれがあったといえる。その上、リンディーとマイケルは、熱心なクリスチャンとして、メディアに協力し、訴訟を提起しないで加害者を許す態度を示したからこそ、特に虚報の被害を受けたことを考えれば、彼らは非難されるべきではないといえる。

IV 報道被害救済の観点からの本件の検討

上述したように、1992年5月に、北部準州政府は、独立した仲裁人であるモーリング裁判官が非公開の報告として政府に勧告した通り、リンディーの3年間の懲役やチェンバレン夫妻が名誉毀損により被った損害について、「法的義務のない支払い」としてチェンバレン夫妻に対して合計130万ドル（1億1,050万円）の補償金を支払った。しかし、未だに責任を認めて謝罪する意向を示していない。

これに対し、謀殺裁判における誤審を招くような環境を作り出したメディアは、チェンバレン夫妻に対して全く救済を与えていないといっても過言ではない。その結果、本件における報道被害救済に関する文献がなく、例えば1994に出版された『倫理とオーストラリアのニュース・メディア』¹²⁹⁾と題した有名な教科書でさえ、その表紙すべてを割いてチェンバレン夫妻の写真を掲載したにもかかわらず、

125) Young (1989), op. cit., p. 8.

126) Id., pp. 11-12.

127) Bryson (1985), op. cit., p. 463.

128) Young (1989), op. cit., p. 12.

文書の中ではこの事件について言及していない。

そこで、1980年代当時のチェンバレン夫妻は、どのような救済方法を求めることができたかについて検討することにした。

1 名誉毀損

チェンバレン夫妻は、事件発生当初から報道被害を受けたにもかかわらず、熱心なクリスチャンとして、訴訟を提起しないで加害者を許す態度を示したので、提訴すること自体に対して抵抗があるのではないかと多くの国民から見られた。しかし、リンディーは、1度だけ1980年の悪質報道に対して差止命令を求めたことがあるし、ステイーヴ・ブライエン記者が書いた『アザリア——世紀の裁判』という本について、無罪判決を得るまでに、出訴期限法の定めにより名誉毀損訴訟の訴権が消滅していなければ、提訴する気があったことを明らかにしている¹³⁰⁾。そして、その弁護士も、謀殺裁判の際、名誉毀損訴訟提起の可能性を考えていたようである。

したがって、チェンバレン夫妻が名誉毀損を理由に訴訟を提起しなかったことは、ただその余裕がなかったからであると思われる。絶え間なく豪雨の報道の対象とされながら、必死に自分の無実を立証しようとしていたので、他の裁判の可能性を検討する余裕がなかったであろう。そして、弁護士費用のために何十万ドルも借金していたので、高額な費用がかかる他の裁判を起こす経済的余裕もなかったであろう。無罪判決を得るまでは自分の無実を証明することも困難であったことも、いうまでもない。

チェンバレン夫妻は、結局、リスクとストレスの伴う名誉毀損訴訟を検討しないで、自己に有利なようにテレビ出演や雑誌インタビューの契約をメディアと交渉することにしたようである。収入（生活費）を確保するという点では、その選択は、賢明であったといえる。

129) John Hurst and Sally A. White, *Ethics and the Australian News Media* (South Melbourne: Macmillan Education Australia, 1994).

130) オーストラリアにおける名誉毀損の訴訟要件については、ミドルトン (1996) 第2章参照。

2 悪意虚偽

チェンバレン夫妻は、1986年に芸能マネージャーを通して初めて自分のプライバシーを商品化させた時点から、商品の名誉毀損のような意味を持っている悪意虚偽 (malicious falsehood; injurious falsehood) という不法行為¹³¹⁾の訴訟要件を満たし得るようになった可能性が高いと考える。しかし、将来独占インタビューを高く売る可能性という有名人の貴重な権利が第三者によって縮小されることがこの不法行為に当たると認めた、ケイ対ロバートソン事件¹³²⁾における1990年のイングランドの控訴院の判決が言い渡されるまでは、この点は、かなりあいまいであったといえる。

3 プライバシー侵害

オーストラリアにおいては、包括的プライバシー権 (general right of privacy) は認められていない¹³³⁾が、プライバシーは判例法および制定法によって一定の範囲内で保護されている。この事件で起きた様々なプライバシー侵害を考えると、判例法上のトレスパス (trespass) やニューサンス (nuisance) という不法行為を理由にした民事訴訟は、十分に可能であったと思われる。また、事実の詳細によっては、ニュー・サウス・ウェールズ州の制定法¹³⁴⁾により定められている盗聴装置の使用 (use of listening devices) という犯罪の起訴も可能であったかも知れない。

131) この不法行為は、当該表現が①真実でなく、②悪意を持って公表され、および③すでに特別損害 (special damage) (すなわち、物質的損害 (material loss) または現実の金銭的損害 (actual pecuniary loss)) をもたらした、またはそれをもたらす可能性があることを原告が立証できる場合に、成立する。詳しくは、ミドルトン (1996) 第4章参照。

132) *Kaye v. Robertson and Sport Newspapers Ltd* [1991] F.S.R. 62.

133) オーストラリアにおける判例法上のプライバシーの権利の発展は、1937年のヴィクトリア・パーク・レーシング・アンド・レクリエーショナル・グラウンズ社対テーラー事件 (*Victoria Park Racing and Recreational Grounds Co. Ltd v. Taylor* (1937) 58 C.L.R. 479) におけるオーストラリア最高裁判所の著名な判決により妨げられている。詳しくは、ミドルトン (1996) 第3章参照。

134) *Listening Devices Act* 1974 (N.S.W.).

4 裁判外の救済方法

裁判所による救済の代わりに、チェンバレン夫妻は、費用をかけずに容易に裁判外の救済方法を求めることができたはずである。

今日、オーストラリアにおいては、印刷メディアによる被害を受けた者は、その編集者に苦情を申し立てることができる。オーストラリアのほとんどの新聞社は、何らかの形で内部審査手を設けている。被害者は、それにより満足できる解決が得られない場合、①オーストラリア・プレス評議会 (Australian Press Council) に事案を付託することができ、さらにジャーナリスト倫理の違反を主張する場合には、記者の大半が所属している②メディア・興行・芸術連合 (Media, Entertainment and Arts Alliance) に苦情を申し立てることができる。これらの機関は、メディアにより設立された自主規制のための組織である。

同様に、電波メディアによる被害を受けた者は、放送事業者との話し合いで問題が解決しない場合、連邦政府の規制機関である③オーストラリア通信及びメディア委員会 (Australian Communications and Media Authority) に事案を付託できる。④オーストラリア放送公社 (Australian Broadcasting Corporation) による放送の場合には、被害者は、その独立苦情審査パネル (Independent Complaints Review Panel) による内部審査を申し立てることができる。

この25年の間、これらの機関は、組織の改革や合併により、多少形を変えているものの、それらが報道被害者に対して提供している救済方法の内容は、基本的に変わっていない。ところで、1980年代において、上記の4機関は、それぞれ①オーストラリア・プレス評議会、②オーストラリア記者協会 (Australian Journalists' Association)、③オーストラリア放送審判所 (Australian Broadcasting Tribunal)、および④オーストラリア放送公社の苦情処理担当官 (Community Affairs Officer) となっていた。

私が調査している限り、チェンバレン夫妻は、1度もこれらの機関に苦情を申し立てたことがない。しかし、この事件に関連して、オーストラリア・プレス評議会への苦情申立ては、これまでに2件あった。

最初の申立てでは、アデレードのニュース紙の読者は、その1981年10月15日号の宣伝に使用された「アザリア検死審問ドラマ」 (Azaria Inquest Drama) という

ポスターが、一般読者に対し、当該新聞がこの事件について何か新しい情報を掲載しているという、実際と異なる印象を与えたとして、苦情を申し立てた。当該新聞に掲載された情報は、一般読者の期待に反して、1年前のものであり、ニュースではないとの主張であった。プレス評議会は、当該広告が、同評議会の行動綱領に違反して公衆の誤解を招くようなものであったとして、苦情申立てを支持した¹³⁵⁾。

もう1つの申立てでは、ブリスバンのサンデー・メール (Sunday Mail) 紙が、1987年6月7日に、ある医学博士が述べた、この事件においてディンゴが有罪とされるべきではない様々な理由についての記事を掲載したことが問題となった。その記事に反論した2名の読者の手紙を次週に掲載したものの、それらに答えるために同博士がすぐ出した手紙を掲載しなかった。博士は、編集者が元の記事に賛成する手紙を掲載しなかったことは不公平であるとして、苦情を申し立てた。これに対し、プレス評議会は、そのような手紙を公表するかしないかの選択は編集者の裁量内にあったとして、苦情申立てを退けた¹³⁶⁾。

V おわりに

リンディー自身が指摘している¹³⁷⁾ように、この事件が生み出した様々な先例によって、オーストラリアは、以前に比べてより公平な社会となっている。オーストラリア最高裁判所をはじめ、様々な連邦裁判所の裁判官が言い渡した判決や北部準州議会が陪審による誤審を乗り越えてリンディーを釈放し、補償金を与えるために制定した法律は、将来誰かが誤って有罪とされた場合に機能するであろう。ただし、リンディーとマイケルには、教会の援助がなければ、最後まで努力できなかったという事実は残っている。

幸いに、ここ25年の間、DNA 鑑定技術が著しく進歩しているので、たとえ今日同様の事件が発生しても告訴までいかないという見解が強い¹³⁸⁾。また、オー

135) Australian Press Council Adjudication no. 122 (January 1982).

136) Australian Press Council Adjudication no. 345 (October 1987).

137) Chamberlain-Creighton (2004), op. cit., p. 775.

138) Skatssoon (2005), op. cit.

ストリアにおける法医学も大分改善されているようである。本件は、実際に、現在、各州、オーストラリア首都特別地域（Australian Capital Territory）および北部準州における法医学を調整している国立法医学研究所（National Institute of Forensic Science）およびオーストラリア・ニュージーランド法医学実験室室長会（Senior Managers of Australian and New Zealand Forensic Laboratories）を設置する契機となった¹³⁹⁾。

オーストラリアにおける報道のあり方については、この事件で、何がどのように改善されたかを示すのは至難の業である。しかし、この事件の様々な出来事の報道について多くのジャーナリストが反省し、以前よりも人権に対する意識が高まっていることは確かである。私自身も、16歳のときに学校で生中継で第1回目の検死審問の判決を言い渡す場面を見、18歳のときに有罪とされ、裁判所から出てくるところのリンディーの様子を見逃さないようにテレビの前で大学受験勉強をした。そのようにして、報道被害への私の関心は、生まれてきたわけである。他の人も、同様にこの事件のことで感動したり、様々なことを考えさせられたりしている。

25年前も、オーストラリア・プレス評議会やオーストラリア記者協会の行動綱領はすぐれていた。しかし、多くのジャーナリストと編集者は、それらが定めているジャーナリスト倫理に違反して行動した。それこそ、アザリア・チェンバレン事件における報道の最大の問題であった。

139) Ibid.